俳句雑誌

水明

2023　7月号

令和五年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六巻第七号

《今月のかな女》

夕虹に驅くる子草に見えかくる

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

外出先で雨の上がるのを待つ間に夕方になり、帰り支度をして外に出る。途中に野原があり、暮れ残る空に虹が出ている。子供が草原を駆けて行く。伸び放題に伸びた夏草に隠れてしまうように見える。

幻想的な夕虹と子供。かな女の眼には、その子が、別世界からやって来た妖精のように見えたのかも知れない。

（鬼之介・註）

水　明

第1114号

―華の一句―

籠枕二つ並べて小半時

原田秀子

籠枕は籐枕とも云い、竹や籐を用いて籠目で円柱形に編んだ枕である。夏の昼寝などに最適で、昔はほとんどの家庭で使われていたのではないかと思う。もちろん筆者の家にもあり、父・嵯迷が愛用していた。

さて、掲出句の籠枕は、秀子さんと仲良く昼寝を共にするご主人のものであろう。ご夫婦揃って楽しい旅の夢を見ているのかも知れない。「小半時」と共に籠枕が江戸情緒のある俳句に仕立てている。（鬼之介・推薦）

水明

令和５年
７月号

今月のかな女

華の一句 …… 1

飛魚の海（作品） 山本鬼之介 …… 4

若狭の秘仏（近詠） 島津初花 …… 6

お宮参り（近詠） 山中みどり …… 7

百尺竿頭 ※主宰作品の鑑賞 五明 昇 …… 8

硯　箱 ※季音月評 井口俊晴 …… 10

季音「雪」（同人作品） 西山貴美子　波多野寿子　星野和葉　ほか …… 12

季音「月」（同人作品） 高島寛治　池田雅夫　梅澤佐江　ほか …… 19

季音「花」（同人作品） 野田静香　笹本啓子　檜鼻ことは　ほか …… 24

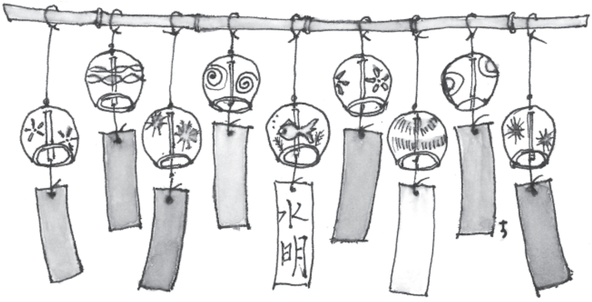
『水明誌』を繙く 山下久代 …… 29

現代俳句鑑賞 網野月を …… 30

☆**水明賞受賞者ノオト**

○自選二十句 横山君夫 …… 32

俳句の醍醐味に迫る 網野月を …… 34



○自選二十句　染谷風子　36

俳句の道をまっしぐら　保坂翔太　38

○自選二十句　渋谷きいち　40

乾杯　野田静香　42

六月号の巻頭句　44

俳誌望見　染谷風子　45

水明集　清水桂子　越田栄子　新　暦文　ほか　46

水明集作品評　山本鬼之介　56

水琴窟（水明集五月号鑑賞）　池田雅夫　60

鼓笛集（同人作品）・私の一句　62

山紫集　64

若狭句碑巡り Ⅰ　青木鶴城　70

若狭句碑巡り Ⅱ　五明　昇　72

水明例会報・各地句会報・夏行のお知らせ　74・78

水明の記事他誌転載　82

夏季競詠・作品募集　83

風声・発展基金御礼　84・85

後記　86

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

飛魚（あご）の海

山本鬼之介

天鵞絨の袋を提げて青葉寺

短夜や仏和辞典を引く女

「北上夜曲」歌ひ昭和を夏の夜

飛魚の最長不倒距離いかに

里山の穴場へ向かふ螢狩

棕櫚縄のきまる袖垣さつき雨

藍染のＴシャツ父の日を飾る

ナイターや地デジＢＳフル稼働

若狭の秘仏

島津初花

山寺の銀杏若葉のうすみどり

観音の手足に不祥事五月闇

石段を登り若葉を仰ぐかな

地蔵百体茂りの中に安座かな

里の田の水溢れ出し山若葉

白壁の倉の家紋へ五月風

鐘楼の下は山門銀杏の芽

わが町の指定文化財の一つに銀杏観音がある。樹齢四五〇年程と言われるイチョウの大木の根元近くに十一面観音像が彫られている。

　このお寺は城谷山諦應寺（曹洞宗）で現在四十一世が在住である。同じくこのお寺の三十世代の住職が村人の疫病を静めるために彫られた観音像である。

　本堂の横の山の中腹には、お礼参りに上げられた（百体地蔵）実数二五〇体が安座している。現在も里の人に守られ、毎年新しく掛け変えられていると言う赤や白の前掛が際立って美しく人目を引く。

　近くに住んで居ても知らずに居ることが意外とあるものです。

お宮参り

山中　みどり

聖五月曽孫のお供宮参り
純白の祝ひ着囀る如し
新緑の神苑鎮座の黒い牛
風薫る産土神に初詣り
乳ねだる児の甘泣きや額の花
万緑や誰彼に似て児の律儀
ただ祈る健やかなれと百千鳥

此の春孫が出産し私達夫婦は曽祖父母となった。小さく整った目鼻や手足。認知症の夫が孫娘から「じいじ抱いてあげて」と曽孫を渡された。と、みるみる表情が輝いて生気が漲りうたい出したのである。その娘が幼い頃抱いては子守歌にうたっていた「草原情歌」である。「遥か離れたその又向こう――」と朗々と……。周囲の私達は普段とのあまりの変り様にただただ驚いて顔を見合わせた。小さな命の輝きがまわりの者達にもたらす幸せのエネルギーの大きさを深く感じたものである。

百尺竿頭

主宰作品の鑑賞　五明　昇

四月号

天平の御代を思うて蓬摘む

蓬（ヨモギ）はキク科ヨモギ属の多年草で日本在来種。良い香りのする新芽を草餅に使うのでモチグサとも呼ばれ、近年の平城宮址の発掘で天平人の食卓に上がったことも証明されている。掲句には華やかな往時に憧れつつ蓬を摘む作者の濃やかな心情が込められている。有馬朗人の〈草餅を焼く天平の色に焼く〉の句にも繋がる世界だ。

賓頭盧の溜まる暇なき春埃

賓頭盧（びんずる）は釈迦の弟子である十六羅漢の第一の尊者で、末世の人々に福を授ける役割を持つ。日本では本堂の外陣に像を安置し、信者が病気している部分と同じ部分を撫でると平癒するという「撫で仏」として有名。何百年もの間参拝者に撫でられ全身はつるつるだが、今も人気に陰りは見えず、春塵の溜まる暇もない忙しさだ。

破顔せる不動明王春の夢

快い眠りの中で見る春の夢にはどこか艶なる趣きの漂うものだが、あの忿怒の形相の不動明王が破顔するとは……、作者の発想の豊かさに脱帽する。不動明王は大日如来が衆生の教化のために敢えて忿怒相をもって現れた化身で、実は煩悩を断ち切るよう導いてくれる慈悲深い仏だと云う。この慈悲に縋って今も「お不動さん」への参詣者の列は絶えない。

嫁入り舟通ひし川の水温む

北利根川を挟んで千葉県と隣接する茨城県潮来市は霞ヶ浦と北浦に挟まれ、古くから水運の要所として栄えた水郷地帯だ。かつては嫁入りする際の花嫁や嫁入り道具の運搬にもサッパ舟が使われており、これが「嫁入り舟」の始まりだという。その後の生活形態や交通手段の変化で「潮来花嫁さん」も姿を消し、今は残された川筋に往時を偲ぶ他ない。

春障子開くる礼法小笠原

小笠原流は弓術、馬術、武家礼式の代表的流派の一つ。武家礼式は足利義満の指南を務めた小笠原長秀が定めたもので、室町・江戸時代はその道の大宗とされ、明治以降は学校教育に採用され、女性の礼式として広く普及した。明るさを増した春障子を美しく無駄のない所作で引き開ける佳人。武家の

質実剛健な文化に即した「和の作法」が際立つ一場面だ。

五月号

腕ひろげ乗込鯛を待つ男

冬に水温の比較的安定している深場で過ごした魚が、春の水温上昇とともに産卵のため浅場に集まることを「乗っ込み」と言う。海釣りで人気の真鯛も乗っ込みをする魚として知られ、産卵期の雄の腹が桜色に染まりそれが桜の花時と重なることから桜鯛と呼んで珍重される。この時期の魚は産卵に向けての「荒食い期」にあたり、大型の獲物を狙うベテラン釣師がこぞって釣りに出掛ける。

酒星や思ふわが身の近未来

酒星（さかぼし）は獅子座の右下に三つ並んで見える星。酒屋の旗と見立てた中国名で、李白が「天若し酒を愛さざれば酒星天に在らじ、地若し酒を愛さざれば地まさに酒泉なからん」と歌ったことで有名になった。掲句は酒星からわが身の近未来に想を飛ばし、読者に様々な空想世界を連想させる。「李白は一斗、詩百篇」（杜甫）の言もあり、酒と芸術とは古来切っても切れない関係にあるが……。

囀を聞き分けてゐる鳥オタク

オタクとは、自分の好きな事柄や興味のある分野、特にサブカルチャーに傾倒する人を指す呼称。鳥オタクは自然を愛する愛鳥家のことだろうが、樹木に群れる小鳥の声を聞き分けている人達に出会うと、何となく心静まる思いがする。最近、「動物が言葉を話す」ことを突き止めた鳥語博士が東大に「動物言語学」の講座を開設すると報じられたが、自然界のドラマには常に尽きせぬロマンがある。

陽炎がおいでおいでを無縁塚

陽炎は春のうららかな日に、地上から立つ水蒸気によって遠くのものが揺らいで見える現象である。その陽炎の中で無縁塚がおいでおいでをしているように見えるという。無縁塚は弔う縁者のいない無縁仏のための墓で万人塚、無縁塔、無縁墓とも呼ばれる。かつては「無縁仏に手を合わせると、その人を逃さないようにあの世へ一緒に連れて行く」という俗信もあり、おいでおいでが怖れられた時代もあった。

荷風忌や万年筆の掠れ癖

永井荷風は、天下一品の名文で『歓楽』『濹東綺譚』などを発表して一世を風靡した文学者だったが、その生き方はかなり奇特だ。死の前日まで四十二年間にわたって書き続けられた日記『断腸亭日乗』は、作家の本音が満ち溢れているだけでなく、明治、大正、昭和における社会・性風俗の貴重な記録ともなっている。四月三〇日の荷風忌、その生涯を思う時、「万年筆の掠れ癖」はこれ以上ない絶妙な取り合わせだ。

硯箱

◆季音五月

井口俊晴

ささごとや丑三つ時の雛たち　星野和葉

草木も眠る丑三つ時。なんだか怖そうだが、こちらは、お雛様たちの「飲み会」のお話。家族が寝静まった午前二時過ぎ、お殿様がアーアと伸びをして「やれやれ疲れた。そろそろ一杯飲みましょうか」と言ったようだ。そうと決まれば早い。五人囃子がカラオケ担当、三人官女がお酒を注ぎ回る。お酒に弱い右大臣はあっという間に顔が赤くなって…。お雛様もなかなか忙しい。

諳んずる北信五岳山笑ふ　五明昇

冬将軍が北の大地に去り、春がやって来た。雪深い北信州では春を迎える喜びがひとしお。長野・新潟県境に聳える山々を、人々は「北信五岳」と呼んで親しんできた。その絶景は山岳写真集などになって人気だ。中でも妙高山は有名だが、地元では「ま・み・く・と・い」と言って、五つの山の名を覚えるのだとか。斑尾山、妙高山、黒姫山、戸隠山、飯縄山の頭文字を取ったものだ。「まみくとい・まみくとい」と唱えてみては。山だって笑いだすこと請け合いだ。

すべり台一直線に下りて春　大場順子

晴れた日の公園は、お母さんに連れられた小さな子供でいっぱい。ぶらんこ、シーソー、お砂場、みんな夢中になって遊んでいる。中でも人気なのはすべり台だ。ちっちゃい指で手すりをつかんで梯子を昇り、やっと頂上に立つ。後は滑るだけ。後ろがつかえているからグズグズ出来ない。ちょっと怖いが、思い切って一直線に滑り下りる。尻もちをついたが面白かった。春、春が来た。

春埃舞ふ白日の兜町　正木萬蝶

日本経済の中心地、東京日本橋の兜町。背広にネクタイ姿の男たちが、きょうも忙しそうに行き交っている。証券取引所では午前中の取引が終わったところで、これからお昼の休憩。このところ投資家の買いが旺盛、相場も上げ基調なので「昼飯はうな丼にしようか」と景気の良い声も。折から真昼の風が吹き荒れ、花粉か黄砂か分からない春埃が舞い上がり、停めてある車のボンネットに積もっている。

仔犬まろまろたんぽぽを踏み荒す　福田千春

縫いぐるみのように丸まるとした仔犬が、野原いっぱい咲き乱れるたんぽぽを踏んづけ、駆け回っている。生後三か月ちょっとだろうか、生きているって素晴らしい、仔犬はそう言っているようだ。我が家のトイプードルはつい先日、一九歳になった。今でも元気に散歩に出かけるが、仔犬のようなわけにはいかない。犬は人間の四倍のスピードで歳をとる。大切に育てて上げよう。

前かがみの菩薩立像藤の花　西浦千枝子

春は大和古寺巡りに出かけたい。寺の境内にはきっと藤の花が咲き乱れていることだろう。薄暗い金堂に入ると、仏様が千数百年の時を超えて私たちを迎えてくれる。私は唐招提寺の日光・月光菩薩や、東大寺の不空羂索観音が好きだが、中にはこの句のように前かがみの仏様もいらっしゃるらしい。思いもしなかった脊柱管狭窄症を患い、前かがみで歩いている私は、仏様も狭窄症ではないかと心配になった。

物干しに踊る猿股春嵐　曲淵徹雄

一瞬呆然とした…。春先の強風で物干しから吹き飛ばされそうになった洗濯物、それが猿股だったとは。色っぽさも何もあったものではない。筆者が子供だった頃は、父親はたいていラクダ色をした猿股を穿いていた。しかし、今はブリーフとかトランクスが普通だ。猿股は「死語」だとばかり思っていた。ところが、根強い猿股ファンもけっこういるらしい。通販サイトには多数の商品が出品されている。作者が猿股ファンだったらゴメンナサイ。

収まりのつかぬ一枝藪椿　飛永鼓

さっきから花瓶に花を活けている。花瓶はちょっと大ぶりの丹波立杭焼で、素朴な感じが気に入っている。だから活ける方も気取ることはしないつもりだが、どうしても一枝だけうまく収まらない。紅色の花がほど良く咲いているのはいいのだが、花瓶の中で椿の一叢という感じにならないのだ。枝の向きが他のどの椿とも違っている。額に汗を滲ませて私の奮闘が続いている。

季音雪

夏帽子

西山貴美子

衣更へてうすくれなゐの帽子買ふ
青柿一つ餞のごとこぼれけり
探偵の胸のしわしわ夏帽子
天辺を玉座とおもふ沙羅の花
軟口蓋つるりと剥けて衣被

夏はじめ

波多野寿子

心静かに歌ふ讃美歌聖五月
きらきらと飲む水うまし夏来たる
薔薇咲いて楽しき会話午後のお茶
麦秋や指切りと言ふ淋しきもの
花合歓や待つ人も無く庭に佇つ

転機　星野和葉

はらと落つはらはらはらと牡丹散る
可不可なきゆるき人生蝸牛
置いてけ堀の蟻かも右往左往して
蟻の列跨ぎガリバーめく男の子
転機てふ女の齢花擬宝珠

麦の秋　茂木和子

葉ざくらの夕べあなたに出会ひけり
卯の花月夜石の兎が啼くと云ふ
日雷面会謝絶のノブに触る
在りし日の人思はるる麦の秋
麦秋の空より鴉もつれ落つ

飯盛山　森本早苗

若葉照る飯盛山に跪く
花は葉に剣舞に偲ぶ白虎隊
薫風や仰け反り仰ぐ「さざえ堂」
漆器買ふ会津十楽八重桜
砂塵舞ふ大内宿を鯉幟

初鰹　矢作水尾

初鰹家紋の踊る大漁旗
海光のきらめく朝やあご飛べり
夏がすみ古城一帯つつみけり
堰いくつ光放ちて水温む
江の電の走る街並柿若葉

雪渓　山中みどり

群青の空に続けり大雪渓
雪渓に挑む男ら赤青黄
雪渓の裾陽の匂ひ水の音
掌のカフェオレ遠望の大雪渓
雪渓の白青春の傷の如

空色の刻　柚木治子

前菜のサラダ青々夏兆す
蚕豆や撮み食ひする反抗期
蚕豆は胎児のまろみ莢に寝ね
道草の愉悦おぼゆる蟻地獄
砂漠行くキャラバンに似し蟻の列

草笛　由良ゆら女

一声は鳥か土手ゆく草笛か
秘密基地戦の合図草の笛
草笛や陰画となりて下校の子
兄ちゃんに負けぬちゃんばら吹流し
群れて咲く紫蘭に迷ふ花鋏

忠弥坂界隈　網野月を

黒も緋も青の威勢も風薫る
汁粥を啜りて三月前安吾
都市中のソルイソンブラ若葉騒
なす苗を植ゑ借金の申込み
茄子苗の蕾の先の紫紺かな

生き生きと　　石井喜恵

田を走る水生き生きと五月来る
束の間を遊ぶ風あり藤の房
五月雨窓の灯潤む茶房かな
一日を豊かに生きむ朝の虹
虹遥か整備士の立つ滑走路

花茴香　　石山かつ子

柿若葉好きに生きよと言はれても
縁談は叔母の差し金花茴香
飛び石はほどよき湿り柿若葉
はやうせよ藁火を焚けよ初鰹
浜のにぎはひ皿鉢料理に初鰹

夏は来ぬ　　大橋廸代

画用紙をはみだす鯱に夏は来ぬ
労働者よりはしやぐ風船西の丸
さびしらに吹く草笛の水谺
五粍なる命尊し目高の子
金芽米（きんめまい）はづむ米寿や巣立鳥

風光る　　大村節代

山またぐ送電線や風光る
夏近しわが変身の見せどころ
楚楚と行く細腰の人夏の寺
夏きざす軍手に残る土ぼこり
夏来る細馬と寝起き調教師

先づは　小倉倭子

思惟仏の指の濡れいろ柿若葉
柿若葉ひかり一筋濡れ仏
百近き姑へ先づは初鰹
初松魚紀州の婿に江戸の嫁
初鰹提げ褐色の漁師の腕

雲の峰　栢尾さく子

藤房の影ずつしりと後頭部
高空の梧桐見ている泪の目
箴言の書にもうつすら春埃
父祖の地でしみじみと聴く豆廻し
残生に願ひごとあり雲の峰

牡丹　菊池ひろこ

長谷寺や牡丹に斜面人に廊
牡丹咲き無彩色となる古刹
母の日のクレヨンの香の残る指
囀や階段険し天守閣
保養地の午後を暗しと松蝉鳴く

夏便り　五明昇

韃靼の風に逆巻く隠岐卯波
老鶯に艪音を合はすサッパ舟
雨も佳し菖蒲田に咲く傘の花
薄暑なほ豚まん匂ふ中華街
舟唄の広ごる川面山滴る

物干し竿　境　延昭

石蹴りの枡目が路地に春の暮
棕櫚の花物干し竿に菜つ葉服
テラスから埋まる五月の喫茶店
醤屋の土管煙突柿若葉
さみだれに紛れ込んだるパスワード

レモンイエロー　椎野　美代子

シャガールの馬が空とぶ薔薇アーチ
折折は淑女なるらん薔薇の園
薔薇に埋むあきれるばかり倦怠感
初恋やレモンイエローの薔薇に似て
にんげんの匂ひらんまん薔薇祭

新茶　島津　初花

子供の日ステーキ七枚買ひにけり
紅さして風に踊るや花豌豆
園庭に白象の来る降誕会
ハーブティは暫しお預け新茶の香
新茶揉む背なを丸めし母のころ

余生の歩み　鈴木　康世

足るを知る余生の歩み五月来る
こめかみの脈打つてゐる麦の秋
石楠花咲く天城峠の迷ひ路
雲翳の野面を走る青嵐
取り替への銅版ひかる棕櫚の花

薔薇の門　　田寺玲子

ジャズ流る旧居留地の薔薇の門
聖堂の絵ガラス映ゆる新樹光
潮風に錆びし海人の家軒菖蒲
波返す海月寄り来るシーバース
繋船の旗ひるがへる青嵐

草笛　　十倉和子

草笛の子らへ一曲リクエスト
草笛を吹きくれしひと征つたきり
草笛は秘密の合図少年期
ドローンで撮りたし泰山木の花
薫風や逸る駿馬の尾のリボン

美少年　　鳥羽和風

リリーフに息子登板大田植
若竹や子供歌舞伎の美少年
夏めくや蔓巻き上がる鉢三つ
竹の子の成りの果てなる竹人形
剥製の雉呼んでゐる雉の声

聖五月　　永野史代

臍を顕はな少年少女聖五月
麦秋や人は鍬持ち戦なし
母の形見を衣桁に掛ける更衣
白椿落ち生涯を全うす
全米オープンゴルフ青芝がたまらない

季音月

五月来る　　高島寛治

寮生の干すシャツ数多五月来る
朝市に着込む一枚夏浅し
葉桜や湖の風来る観音堂
方円の皿に溢るる夏料理
白牡丹五重塔を遠巻きに

蛍火　　池田雅夫

啼鳥に耳聡き旅明易し
万緑に埋め尽くさるる鏡池
生鮮の衰色恐れ黴おそれ
蛍火の点滅闇の奥深く
午後三時うだる暑さの袋小路

夏がすみ　　梅澤佐江

静謐な時を纏へり夕牡丹
妙齢の塩瀬の帯や柿若葉
八金の恋にも旬や初松魚
夏がすみ魁夷の白馬現るや
夏霞池塘を包み込む静寂

薔薇垣　　森川義子

連山を映す代田の水鏡
薔薇垣や女ひとりの灯を点す
旅は東北すかつと晴れて里若葉
鐘一打山にこだまし夕霞
瀬戸内の小さき社や夏霞

卯月波　　大場順子

鑑真の越え来し海や卯月波
卯波美し八方玻璃の美術館
花棕櫚の黄金垂るる異人館
夏めくや鏡を過ぐる真白き帆
四方の新緑水面に映し嵐山

坊主いろいろ　正木萬蝶

楽天で贈る母の日プレゼント
越前屋はいつも悪人葱坊主
緋牡丹や媽祖華やかに飾られて
灯台の死角に卯波胸騒ぎ
麗人の泪は甘露夜の牡丹

万緑　松井由紀子

万緑の雨は明るし音もよし
万緑や盥で洗ふユニフォーム
万緑やガラスのビルは翡翠色
万緑やスイッチバックの峠越え
万緑や手掘りトンネル風通ふ

父の日　藤澤喜久

万緑や自衛隊駐屯地と有り
万緑に命染まりて噎せにけり
パスタ食むみどりのマニキュア夏の雨
こどもの日老いたる父の日とも思ふ
何某の男運とや王妃の薔薇

帆引船　丸山マスミ

夏きざす風連れ奔る帆引船
姫街道木洩れ日きらと夏立ちぬ
五月風しばし筆擱く写経の間
観音の天(てん)衣(ね)に遊ぶ風五月
円窓の切り取る庭やさみだるる

餅草　松宮保人

小柄杓に注ぐ仏や甘茶寺
御手洗に揺るる手拭きや夏隣
未だ青きバナナ仏に山と盛る
搗き立ての餅草の香に母偲ぶ
夏めくや抜くる風あり宿場町

薄暑　荒井倶子

屋上に小さき菜園豆の花
少女等の軽き装ひ街薄暑
夕薄暑おいてけぼりの観覧車
戒壇を出で今生の薄暑かな
老鶯や無住寺に古仏たち

花卯木　井上燈女

柿の花炊飯ぱらり仕上がりて
噴水の折れやすき秀や夕風に
本尊の他にも秘仏風薫る
酒蔵の崩れしままに花卯木
麦を刈る農夫の手の平すぐ乾く

木の橋　内田恵子

春雷やテトラポッドの白ばんで
若鮎やはじめて挑む一人旅
戦ひの続く五月の空の不安
感染症と長き闘ひあやめぐさ
菖蒲田を跨ぐ木の橋車椅子

箱車　町野広子

柳絮とび煮沸何度も哺乳瓶
葱坊主水子地蔵に赤いべべ
葱坊主幼児五人を箱車
夏近し金糸の帯は妣の物
「私癌なの」知人三人竹の秋

麦の秋　井上玲子

麦の秋落暉追ひゆく鳥の群
金色の風さはさはと麦の秋
満身に若葉の息吹富士樹海
渓風のわたる吊橋夏霞
久闊を詫び手土産に柏餅

牡丹園　福田千春

牡丹や花蕊に虫を遊ばせて
牡丹や座して鏡に吾写す
朝の陽にチュチュ舞ふやうな牡丹園
麦秋や此処に彼処に兵の墓碑
影ひいて水面すれすれ夏燕

讃美歌　松本光子

仔牛啼く小屋に屑人参の山
讃美歌の流れし病棟麦の秋
麦の秋田舎教師も髭のばし
麦秋や艇庫の裏に干すジャージ
ロボットの運ぶランチや麦の秋

昭和の日々　渡辺舎人

だから云つたぢやないのあんた昭和の日
たんぽぽ野 On Your Mark Full Marathon
双つ蝶ささやきて空ラ迷ひだす
耐久走大声に中学一年生
まみどりのあぢさゐの芽の満遍に

夏霞　山田美佐尾

春風や太き眉毛の金太郎
母の手の温りこめて柏餅
里山や家々つつむ新樹光
ナイターの光割(さ)きゆくホームラン
富士の五合目眼下をかくす夏霞

ピアノの調べ　野口和子

みどりの日乳の香残る産着干す
夏めくやピアノの調べ地下ホール
花アカシア川の匂ひの濃き日なり
片袖の触れて山椒の香の動く
老鶯や山越えらしきバイク群

風薫る　川崎道子

風薫る母と連弾駅ピアノ
薫風や落慶式の幕はしやぐ
不揃ひのブラスバンドよ若葉風
草笛の音程はづる愛唱歌
野仏の居眠り覚ます草の笛

青嵐　上戸千津子

燕の子軒の賑はひ水入らず
裏山を動かす音や青嵐
三つ編みの如き紫蘭の莟解け
莟の花続く里山古戦場
夢追ひつ八十路に別れ聖五月

浜離宮　松山清子

外国人の行列つづく築地初夏
潮入り池満ちて来る薄暑光
お茶席に脚もてあます青葉光
若竹や脱ぎ捨てるものあまたなり
牡丹散る旧友ひとりまだ来ない

雨のドライブ　西浦千枝子

ドライブで摘みし蕨をお裾分け
真青なる生家の庭の鯉幟
新緑の雨のドライブ絵画めく
此の村に古墳の多し夏きざす
五月五日祝餅背によちよちと

人造湖　近藤徹平

朧月眠りにつかぬ人造湖
五月闇表札褪せし武家屋敷
海開き飛行機雲は交差せり
はちきんの辞さぬ大盃初松魚
取れ立ての朝の食感青胡瓜

万緑　大塚茂子

どつしりと万緑に座す貴惣門
万緑や老いて身内に燃ゆるもの
芯のある飯もおこげもキャンプの夜
夕立にフォークダンスの腰折られ
夕立雲蜘蛛の子散らす川遊

花一輪　熊倉千重子

蔵町が好きで天(そら)よりつばくらめ
麦の秋胸に琥珀のペンダント
母の日や花を一輪買ふ男の子
蚕豆の青さも馳走手が伸びて
だんご屋の方へ右折の蟻の列

俳句 8月号予告
7月25日発売
予価1,040円(本体945円)⑩
特別作品　宮坂静生・大串 章・石田郷子
大特集
報告句を抜け出せ！
日常も詩へ、推敲のコツ
▼総論　報告から詩へ……今瀬剛一
▼推敲ポイント　文法と活用／言い換え／語順／助詞
視点や場面／省略、切れ
人物特集　没後40年　中村草田男
追悼　齋藤愼爾
付録　季寄せを兼ねた俳句手帖 秋
※内容は変更になる場合があります。
電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。
発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

季音花

二重虹　　野田静香

陸送のトラック抜くる夜の新樹
ふる里の景を包まむ二重虹
戴冠の典雅な調べ青時雨
二度生くる覚悟の眼山椒魚
夕星や明日は離るる磯涼み

夏落葉　　笹本啓子

大人ぶる少年の声子供の日
夏落葉巫女の緋袴翻る
公園にキッチンカーや街薄暑
帯留に魔除けの般若絹袷
老鶯の声あとさきに札所道

光り物　　檜鼻ことは

木の家を探しています初燕
雀の子ひとり離るる子の側へ
棟上げは二つもむかし若緑
美しき折り目のスーツ新社員
ひかりものたのみ一献夏隣

雨垂れ　　原田秀子

雑魚寝して雨の音きくキャンプかな
籠枕ふたつ並べて小半時
雨だれのリズム楽しむ夕立あと
ショパン聴くプレコンサート聖五月
黒鍵を躍る指先五月来る

幾何の解　　青木鶴城

春の果迷宮に入る幾何の解
融解になほ雪渓の閉ざすもの
十年の記憶掘り出す夏磯辺
かたつむり地球の果の遠きこと
貌佳草あれは誰だつたのだろう

いつのまにか　日高道を

五月雨や曾ては村に渡し舟
成田屋の十八番弁慶風青し
飛魚に鳥の称号贈りたし
夏の夕嚊天下の声の主
母の日はいつか妻の日二人旅

不開の門　曲淵徹雄

ひもすがら顔出さぬ富士磯遊び
耳鳴りに混じる雨音花の冷え
背のびする草木ものかは桜草
ゆくりなく不開の門を越ゆる蝶
五色幕のさやぐ法堂夏めきぬ

母の日　石川理恵

なんだかんだで四日も食す柏餅
初鰹三ツ星店のカルパッチョ
緑雨きて整つてくる調べかな
緑雨に佇むペコちやんもサトちやんも
母の日や総菜持つて花持つて

一眼レフ　保坂翔太

昇進の大盃や春の月
逃水や若き日の色濃くなりぬ
囀や一眼レフのマニアの眼
春の暮声色弾む糸電話
紅白の牡丹と競ふ巫女の舞

若葉　宮﨑チアキ

本当は剪りたくないよこの若葉
みちのくを走る人力若葉の天
母の日や大人びし顔並びをり
くつろぎの座敷にすいと夏燕
田園を包む入り日や麦の秋

夏めく　飛永鼓

裏山の緑迫りて夏きざす
むんむんと濃くなる緑夏めきぬ
少年は面伏せるや夏めいて
伸びるもの精一杯伸び夏きざす
もう少し頑張つて見よ夏きざす

薔薇のオーラ
下川光子

ひとつ又ひとつと薔薇に顔寄せて
大輪の薔薇のオーラや遠巻きに
薔薇の園香りを乗せて車椅子
薔薇園に気怠き午後の手風琴
サイダー飲む喉に風の通り道

昭和に残す
石田慶子

白牡丹やさしい嘘の終はる時
天仰ぐこと無き路地の鯉幟
ラジカセのあの頃の曲昭和の日
麦秋や浮かんで消ゆるヘルメット
宇宙人降り立つ気配麦の秋

初夏の朝
河野はるみ

柏餅円きほつぺや今二歳
牡丹生け茶事の真似事してをりぬ
緋牡丹やしかと支ふる細き茎
赤燈やスカイツリーを夏霞
出立す銀河鉄道夏霞

清和
葛城千世子

清和の旅名簿に我名みつからず
褪せ靡く平等院の藤の花
草笛やなんともならず鼻息に
草引くや指の曲がりのそのまんま
髪洗ふ朝一番の仕事終へ

神田祭
田中章嘉

神田祭見るも滾らす異邦人
よしきりも古墳の葦に守られて
高原にテント撩乱天の川
老齢の田植仕舞と苦笑ひ
紫陽花や猫の額の庭に咲き

つつじ燃ゆ
中野彊

つつじ燃ゆ群青の湖箱根かな
若人に席をゆづられつつじ燃ゆ
渋滞と云ひ訳のバスつつじ燃ゆ
男富士今や盛りのつつじ園
迷ひ鳥窓開け放ち初夏の空

晩鐘　松島寛久

牙をむく檻のバナナに白鼻心
足元より雉飛び出し明日は吉
「勿体ない」腐つたバナナ婆がむく
初夏の灯台守る鷗の輪
魚干し蓬を摘んで晩鐘かな

夏の海　後藤綾子

夏蜜柑豊かにみのる武家屋敷
はだか馬に乗りし少年夏の海
露天風呂へ長き階段鬼やんま
西日背に練習船の入港す
西日受け霊峰富士の揺るぎなし

薔薇に棘　瀬戸雄二郎

美人すぎ未だ独り身薔薇の花
棘無きは香りも薄し薔薇の花
この薔薇を全部煎じりや惚れ薬
無人駅薔薇を世話する人の居て
水見えぬ玉川上水夏の雨

菖蒲湯　横山君夫

夏めくや働く袖をたくし上げ
牡丹果つ花弁の嵩のかくまでも
方丈は子連れ客らし若葉雨
菖蒲湯や真の勇気を語る父
押鮓や一つ覚えの旅土産

キネマ旬報　染谷風子

磯祭遥かな沖をサブマリン
我が城は六畳一間桜草
陽炎の中に捨て行く前頭葉
天命も知命も知らず心太
色褪せしキネマ旬報麦の秋

新樹　渋谷きいち

照り返す寺の反り屋根新樹光
古き教会新樹まぶしきウェディング
掌で打つ山椒の葉筍飯
三陸の海「風の電話」の夏帽子
ナイターの明かりは遠し叩くラジオ

麦の秋　　鈴木玲子

ゆく春や男の羽織る一つ紋
葱坊主住職のゆくオートバイ
パーマネントの女ふくよか麦の秋
銀輪の青空へ消ゆ麦の秋
境内の影踏みめぐる子供の日

草笛　　髙橋満耶子

草笛や少し本音を吐き出せり
アクリル板外し面会母の日よ
てきぱきと外科医は女性風薫る
薫風や黄金馬車は木の座席
山火事に用心せよと緋のつつじ

枯山水　　野村美子

産土や茜の空に柿若葉
銀閣や枯山水に松落葉
石畳ゆふべの風の夏落葉
万緑や沼の細波エメラルド
屋台村旅の夕餉の初鰹

毎月25日発売
定価1000円(税込)
月刊 俳句界 2023年8月号

特集 句集『広島』を読む
○句集『広島』について　飯野幸雄
○句セレクション
○句集『広島』を読んで
池田澄子　今瀬剛一　高山れおな
加古宗也　照井 翠　マブソン青眼
角谷昌子　小林貴子　堀田季何
石川まゆみ　生駒大祐

〈グラビア〉俳句界NOW　碓井真希女
特別作品21句　髙松守信
追悼 黒田杏子 〜季語の現場人の軌跡
○論考・句セレクション　高田正子
○エッセイ〜氏との思い出　筑紫磐井
○師の魅力　坂本宮尾　五十嵐秀彦
今井 豊　中岡毅雄　岩田由美　三島広志
○継承への想い　董 振華
＊セレクション結社「麒麟」西村麒麟
私の一冊　淵脇 護「河鹿」
対談　佐高信の甘口でコンニチハ!　松原文枝(テレビ朝日ディレクター)
「俳句界」投稿欄　一流選者14名!日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。
株式会社 文學の森　お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』を繙く（水明五月号）

山下久代（「形象」編集長）

花の裏見せて桜の水鏡　藤澤喜久

一読した途端、視点が水の中に引き込まれた。いわば水鏡の裏側だ。そして、水の中から見上げたとき、最初に目に飛び込んできたのが、夥しい数の桜の花びらだった。水面に散り浮く桜の花びら、その裏側から透かして見る世界。なんという瑞々しさだ。なぜ、こんな感懐が生まれたのだろう。おそらく、この句が「花の裏」から始まっているからではなかろうか。ゆえに「桜の水鏡」という詩語が心にとどまる。

構造上の観点からも一句の強靱さを感取し得る。もし、忠実な情景描写に徹すれば「水鏡桜の花の裏見せて」という語順も有り得る。あるいは「水鏡花の桜の裏見せて」となると、「裏」という一語に心情的かつ象徴的な意味合いも生じてくる。そこで、視点を地上に置いて読み返してみると、新たに別の表情を見せてくれる。水鏡に映っているのは満開の桜並木だ。実に華やかである。正に「花の裏」は、この華やかさの裏側を暗示している。しかも、時空を超えて呼応するかのように、水の鏡と空の鏡とが照らし合うのだ。やはり、この句は「花の裏見せて桜の水鏡」でなければならないのだ。

せせらぎに何を映さむ春彼岸　青木鶴城

春の小川に何が映されるのか。はじめに「春」のもたらす明澄さに惹かれた。そしてあらためて「何を」という言葉に導かれ、あらゆることを想像している自分に気付く。春の朧と未知の世界が相俟って「何を」を曖昧にする。確かな手応えを得られないまま、なぜか心は明るい。だからこそ探し続けることができる。加えて「写す」ではなく、「映す」であることにも着目したい。より明確な意志が必然となるのだ。

「春彼岸」とあるから、おのずと故人の面影も偲ばれる。また、春分の日は彼岸の中日にあたる。「自然をたたえ、生物をいつくしむ」という趣旨を汲めば、再生への希望もふくらむ。もちろん「春彼岸」は時節を示す言葉である。しかし、あえて「せせらぎ」に沿うように解釈すれば、春の小川の此岸と彼岸を思わせる。そのとき此岸は東側、彼岸は西側となり、時空を流れるひとすじの川が現出する。

さらに「せせらぎ」を水の流れる音として鑑賞することもできる。しからば、音の世界に映されるものを想像することになる。ここには新たな聴覚の世界も展開している。

現代俳句鑑賞

網野月を

かぎりなく空になりたい冬野かな　佐孝石画
（『俳句四季』5月号・冬霧より）

中七の「なりたい」から、「冬野」を擬人法的な用法で句の文脈に取り込んでいるのが判る。ただそれは言ってみれば言い回しの問題で、作者がそう見ている、そう見て把握したいということになるであろう。作者の意志が働いていないとしても、作者の眼前の景の中の「空」と「冬野」が同化して見えているという客観的事実があるのである。句の意味とその意味が要求する言い回しが見事に合致している。他に「人混みに紛れる冬霧になるために」「こっそりと石が石生む冬日かな」がある。

ゆつくりと海へ筏を組む落花　野木桃花
（『俳句四季』5月号より）

眼前の花筏を見据えて詠んでいる句である。「海」はもしかしたら地理的に遠距離なのかも知れないが、やがて「海」にたどり着くであろう花筏にエールを送っているようにも読める。上五の「ゆつくりと」は花筏への労わりの心を表現している。

裸木となりて齢を恐れざる　雨宮きぬよ
（『俳句四季』5月号より）

大樹には「齢」など関係ないということである。「裸木となりて」とクッションを置いたような、遠慮したような措辞であるが、座五の「恐れざる」の強固な意思表示は、無限である。作者でなければこの言い切りは不可能であろう。

正面が海のてつぺん桜東風　石橋翠
（『俳句四季』5月号・鎌倉高校前駅より）

作者の親しんだこの海が「海のてっぺん」なのである。理屈でもないし、信じている訳でもない、自然にそう思えている、受け止めているということなのだ。

日脚伸ぶ伸びた分だけ老いており　堀越胡流
（句誌『鬣』第87号・倒立より）

「日脚伸ぶ」は冬至後の状況であって、この場合座五に齢のことが出ているので、数え年のことを考え併せれば、新年を迎えた時期の設定ではないだろうか。「老い」というのは一歳加わえたという意味に過ぎない。ただ句はより微細なと

ころまで表現していて、「伸びた分だけ」と言っているのであるから、一日一日の時間の経過を加味している。一日一日が大切なものであり、愛おしいということなのである。他に「倒立を綺麗に決めて卒業す」がある。

黒さとは若葉を得たる柿の幹　山田耕司

（句誌『円錐』第97号・歩めとぞより）

「黒さ」に込めた意味の大きさに驚かされる。無論、「若葉」との対比から「黒さ」を実感しているのであるが、その「黒さ」の頑健で、頼りがいのある「黒さ」は比類なきものとして詠まれている。色合いの「黒さ」というよりも「黒さ」の中に作者が見出した「黒さ」の度量の広大さを筆者は感じる。「若葉を得た」ときの頼もしさを感じるのである。

ふくろふの首は正夢見る角度　吉田祥子

（句集『しなやかな線』より）

「首は正夢見る角度」は言い得て妙である。梟に「正夢」があるかないかは分明では無いが、即納得してしまう。言われれば梟の首の能く周り、傾ぐことであろうか。肩こりをとって血の巡りを良くしてから眠りに就こうというのであろうか。梟に親近感さえ覚えるのである。それは兎も角、智者・賢者としての梟か、不気味な存在としての梟か読者の心にある梟で解釈が異なるかも知れない。他に「肋骨のしなやかな線涼新た」「囀やカンバスに置く黄の雫」「ふるさとの湯船は深し雪催」がある。

石井喜恵

寒椿熾火ひとつを胸におく
菜の花や世話女房でありし頃
春寒し角の突張る紙袋
兄が立ち弟がしやがむ蝌蚪の池
蔵の影愁思の我を閉ぢ込めぬ

（句集『風を踏む』より）

仕事人としての作者について筆者は何も知らない。句集の句句からは俳人としての作者の視線の強さと確かさが感じ取れる。と同時に家庭人としての横顔が僅かに垣間見られるだけである。それで十分なほどにこの句集は完成している。先に挙げた五句はいずれも家庭人としての作者を想像して句集の中から拾った結果として選ばせて頂いた句句である。作者にとっては思い入れ深い作品であることは当然なのであるが、読者にとっても、どれも愛おしいほどの作品ばかりである。つまり読者の心に飛び込んでくる句なのである。

第一句の「胸におく」「熾火」を考えれば自ずと上五の季語「寒椿」が見えて来るし、第二句の中七座五の句意から「菜の花」の季語の本意に読者は気づかされる。第四句の「蝌蚪の池」はファミリーヒストリーのように筆者は読んだ。その中で第三句の客観的な目が俳人としての作者の想像世界の輪郭を提示しているし、一方第五句の心象的作法は想像世界の深さを物語っている。

句集としての完成度の高さ、一句一句の立ち方の見事さに読者は出会うことが出来る。

自選二十句

横山君夫

立春や昨日と違ふ空の色
庭の色動き出したり蕗の薹
大手門くぐれば桜ふぶきかな
春の野の息吹ありあり蝦夷地にも
陽炎や真つ赤なポルシェ浮いて去る
瀬戸内の漁船の水脈や薄暑光
夏草に手を泳がせて河畔まで
虹立つや校舎の窓に顔顔顔
炎天下水禍の土砂を掻く媼

日焼子の一歩も引かぬ面構へ

新米を磨げばタンゴのリズムかな

脱藩の竜馬菊師に水貰ふ

嘘つけぬ目の真鰯を朝市に

稜線まで色を重ねて夕紅葉

秋暁の水の硬さを手に掬ふ

百獣の王も小春の大欠伸

磴百段のぼり切る間の時雨かな

襟巻や町の長老然として

満開といふもつつまし冬桜

茶寿までと言ひ切る叔母の雑煮膳

水明賞受賞者ノオト ———〈横山君夫〉

俳句の醍醐味に迫る

網野月を

横山君夫氏の俳句に接するとき、「この句をどう鑑賞してくれるかな?」と言う愉しみを味わっているように感じるのだ。氏が読者に対して問いかけているようなのだ。喩えて言うなら、考案したばかりのフレンチを提供するときの星付レストランのシェフのような雰囲気も感じるのである。読者が試されているようでもあり、というよりは読者とのやり取りを愉しんでいるようなのである。将に、氏は作句においても鑑賞においても俳句の醍醐味に迫っているのである。

作句の重要なポイントに経験値（知）、現実感、肯定感があると筆者は考えている。体験を如何に経験値に翻出できているのか、現実感をどこまで文学的表現に昇華しているか、そして句自体の肯定感をどのように演出できているかの三つのポイントである。

この三つのポイントに照らし合わせながら、先ずは受賞対象になった去年の水明集に掲載された句句から筆者の盲選による十二句について鑑賞してみたい。

大白鳥湖抱くやうに舞ひ降り来
キャンパスの楡の大樹や冬芽満つ

前句は中七に直喩表現がある。後句は中七に切れ字「…や」を用いている。どちらも難しい表現技法にチャレンジしていて、見事に成功している。要するに対象をよく見ているからなのである。対象を把握する力が深いのである。その分対象の本質に迫っているのである。次句は、現実感の横溢した句作りに成功している句である。

籾殻を隅々探り手に林檎

簡潔に書いている。が、ここまで簡潔に言い切ることになかなか行き着けないものである。現実感を文学的表現に昇華させている作品が、次の三句である。

春浅き山に県警ヘリコプター
ふらここを漕ぐやぐいぐい女児無敵
線路工夫どかどかと来て夜食かな

二句目、三句目は巧妙なほどにオノマトペを挿入していて、「女児無敵」「線路工夫」の固い措辞を生かすことに成功しているのである。

次の二句は回想の句であろうか。

父となる窓を開ければ初桜
遠雷や遠くを見よと父の声

どちらも「ちち」が登場するのだが、自らのことであった

り、お父様のことであったりする。次の一句は秀句である。

筍を快音一打掘り上ぐる

俳句は短詩であるだけに言切ることの潔さが求められることがある。掲句は言切る詩容を全うしている。

さて次の三句であるが、受賞対象句の中で筆者が最も推奨したい三句である。

片脚を大河に浸し虹の橋
琉金の鰭の動きを見て飽かず
撫でてやることも出来ずに金魚死す

経験値、現実感、肯定感いずれをも受容することの出来る作品である。三句目の「…死す」は死（＝生の否定）を認めることで自己の肯定感が増すように思えてならない。

次の本誌掲載の自選句について四句を鑑賞する。

新米を磨げばタンゴのリズムかな

掲句は遊びの句である。遊びと言っても軽妙な感覚で心性を解き放つような遊びである。新米を研ぐリズムがギローの音のように想像される。

嘘つけぬ目の真鰯を朝市に

二句目は現実感を演出する句作りになっている。倒置法とも考えられる座五の「…に」に発見の意味付けが読み取れるのだが、それは現実のみでなく、より聖的な要素を見出したような感がある。「嘘つけぬ」という擬人法に拠る。

稜線まで色を重ねて夕紅葉
秋暁の水の硬さを手に掬ふ

この二句は、現実感の充足した句であると考えられる。加えて文学的表現の措辞「色を重ねて」「水の硬さを」がホゾとなって句意というホゾ穴にぴたりと嵌まっているようだ。

最後に筆者選の山紫集から二句を鑑賞したい。

恋猫の張手に倒ける招き猫

「招き猫」はどちらかの手を振りながら、様々なものを招いているから、手を振っているのは「招き猫」の方なのである。その「招き猫」を張手で倒したのが上五の季語「恋猫」である。「招き猫」と「恋猫」がまるでボクシングしているような景なのだ。「恋猫」は「招き猫」を好敵手と見誤ったのであろうが、何とも妙な感覚の句なのである。

蜩や木椅子のなじむ喫茶店

上五の季語「蜩」で設定される音の空間に「木椅子」「喫茶店」を把握している。通常は空間を狭めて行くのだが、掲句は「木椅子のなじむ」を「喫茶店」の修飾句にすることで、語順を逆転させた。上五の切れ字「…や」をはじめとする格助詞などの構成が巧みに機能しているからである。

氏の創作世界の全体像は中中に書ききれないのだが、俳句への氏の姿勢はご紹介できたものと思う。

自選二十句

染谷風子

掛茶屋に電車の絵本山笑ふ

右書きの虎屋の暖簾利久の忌

南指す海舟像を飛花落花

かつて此処に「銀巴里」ありき花曇

春袷寄席の目当ては「明烏」

卯の花腐し借りる細身の女傘

是よりは女人禁制木下闇

烏賊を焼く女のうなじ夜店の灯

蟷螂の恋やおお七は丙午

黄金の国ジパングを黍嵐

借方も貸方もあり西鶴忌

辻に立つ戦捷の碑よ草紅葉

冬めくや唐人笛が遠くより

しぐるるやかつては此処に数寄屋橋

肩窄め熱燗二本ガード下

丁半で占ふ老後桜鍋

五十年添うて乙夜の葛湯かな

寒星や秘湯の宿の俳談義

寒の水嚼んで海馬を目醒めさせ

老いてなほ滾る闘魂寒稽古

水明賞受賞者ノオト ――――〈染谷風子〉

俳句の道をまっしぐら

保坂翔太

平成二十七年六月の大宮読売俳句教室において、氏と初めて顔を合せた。私が俳句を始めたのも大宮読売俳句教室であり、私の二年後輩である。令和二年九月より「りんどう俳句会」と名称を改め現在に至っている。氏の入会以来、八年間同じ句会で投句を重ね、合評の時をもっている。令和五年一月号より染谷正信改め、染谷風子として、俳句に勤しんでいる。水明集に掲載された一年間の句と自選二十句の中から、氏の句を繙いてみたい。

忠義なぞ今は流行らん建国日
切腹は武士の心得初桜
霧の村忠治を慕ふ民いまも
落武者の潜むけはひや芒原

強みは、歴史を題材にして詠む句にある。ちなみに、氏のカラオケの十八番は、新納鶴千代を歌った「侍ニッポン」である。新納鶴千代は、郡司次郎正という作家の小説「侍ニッポン」の主人公である。架空の人物ではあるが、時の大老井伊直弼の一子・新納鶴千代が、大老襲撃の水戸浪士との誓約、そして桜田門外の変にその命を終えるまでを愛情とロマンの中に描いている。句にその情趣を醸し出している。

短夜やかつて御国に通ひ婚
蟷螂の恋やお七は丙午

この二句も歴史を題材にしているのであるが先の四句とは趣を異にする。平安時代に思いを馳せた「通ひ婚」は、季語「短夜」とは絶妙の取り合せである。また、季語「蟷螂」は、雌が雄を食い殺してしまうそうであるが、それと「お七は丙午」を取り合せて詠んでいるのもうまい。丙午生まれの女は夫を殺すという迷信があるからである。

借方も貸方もあり西鶴忌
鳥雲に一茶の越えし浅間山
浅草のはだか踊を荷風の忌
北を向く啄木の墓雁帰る
文弱な人は嫌ひよ単帯

江戸、明治、大正期の俳人や小説家の句集に傾注したとのことなので、すんなりと西鶴、一茶、荷風、啄木を詠込んでいる。「文弱な人は」の句は、昭和十一年に「ホトトギス」の同人を除名された杉田久女の「虚子ぎらひかな女嫌ひのひ

とへ帯」の句を念頭に置いたものであろう。かつて競い合った長谷川かな女が婦人俳句会のリーダー格として依然活躍を続けているのに嫉妬していたに違いないのであるが、そんな気性の激しい久女のことを氏は、当然知ってのことである。

お河童のはないちもんめ木の芽垣
柏餅成績表に五が一つ
空梅雨や村中廻るちんどん屋
時雨るるや戸口に掛かる蓑と笠
継ぎ当てのズボンの記憶空つ風

氏は、昭和二十二年、埼玉県羽生市生まれで、農家の長男と聞いている。句に、子どもの頃の様子を伺うことができる。ちなみに、利根川沿いの羽生の町は、水利がよく、土地も肥えており、早くから農耕文化が栄えたところである。古い塚や古墳もあり、埴輪が出土している。このため羽生の地名は埴輪から転化したものだといわれている。

三三九度の記憶仄かに屠蘇の盃
恙なく禁酒十年屠蘇の酔
五十年添うて乙夜の葛湯かな

この三句からは、幸せな人生を送ってきたことを想像させる。病に臥せたのは、酒のためという訳ではないと思うが、病が治癒し、禁酒を誓ったのである。細君の支えにより、恙なく過ごしている有り様が詠込まれている。現在も氏は、酒は殆ど飲まない。

しくじりは男の誉れ松の芯
屋根裏は男の根城春の蠅
これしきの石段に杖松落葉

句からは、不屈の精神を垣間見ることができる。また、反骨の精神をも見て取ることができる。「しくじりは男の誉れ」は、季語を若緑の傍題「松の芯」と詠んだところに氏の心意気が表われている。「屋根裏は男の根城」の句は、実際に屋根裏が根城なのかは定かではない。定年後は、家に居ると細君より煙たがられているのであろうか、図書館通いと聞いている。季語「春の蠅」に笑いを誘う。「これしきの石段の杖」は、夏の季語「松落葉」を当てているが、松は、古来、長寿の象徴として尊ばれているので、憎い取り合せである。

春浅し前頭葉が武者震ひ

季語の「春浅し」に対し「前頭葉が武者震ひ」と詠んでいる。「武者震ひ」は「戦陣に望む時などに心が勇み立って体のふるえること」である。俳句の道をまっしぐらに突き進むと宣言しているようにも感じられる。

さらに、氏の強み生かしつつ、豊かな知識を基に、新たな領域へと踏み出して行くのではないかと期待し、今後の大いなる飛躍を祈っている。

自選二十句

渋谷きいち

囀に吾が口笛のラプソディー
早春やただなんとなく銀座まで
思ひ出は暗渠にかくれ水温む
のどけしや居眠る母の手にバナナ
下町の人情じんと春の暮
玄関に小さき靴や豆御飯
朝もやの尾瀬の白虹小屋泊り
走り梅雨返しそびれし女傘
ペグ打てば手に山蟻のソロキャンプ

八月や錆びたバイクに油さす

踊の輪抜けて屋台の売子かな

肩の小屋まで走れば五分秋の雷

虫しぐれ臥せる母御の息さぐる

唯一無二青き地球の秋の色

文化の日路上ライブのハウリング

母の背より値札がのぞく余寒かな

薪割りの斧にぽつりと初時雨

冬菜抜くGのマークの野球帽

撓むほど実る北限みかん山

吹越や路地より匂ふ焼まんぢゅう

乾杯

野田静香

水明賞おめでとうございます。
渋谷きいちさんは、別所沼の「はじめての俳句教室」卒業一期生です。そして皐月の会の頼れるリーダーです。きいちさんの句は艶のあるものから、少年の心のような繊細なものまで大変幅が広いのです。又、非常に親御さん思いで、現在百四歳になられる御母様の句が多く詠まれています。そして山男でもあり、今もお仲間との交流を持ち、時々句会もなさるようです。那須には山小屋をお持ちで野菜を育て、自然の中に身を置くことも忘れません。更にサッポロビールを退職されても、愛社精神が強く、時々句会でビールの話が出て場を和ませてくれます。

俳句は人柄が出ると聞きますが、早速鑑賞してみます。

肌寒のはなれて二人レモンティー
待ち人遅したたむ女の春日傘
走り梅雨返しそびれし女傘
指切りの爪の半月春愁
朧月愛と言ふ字に酔ひにけり
たこ焼に楊枝が二本西鶴忌

「肌寒」の句は爽やかなカップルに微妙な空気感を、季語の「肌寒」が物語っています。「待ち人」は長時間待たされた女性が、諦めて駅に消えてしまったと、鑑賞しましたが、いろいろと想像の膨らむ句です。「指切り」は爪の半月に着目したところが、きいちさんの鋭いところです。「たこ焼」は「楊枝が二本」が見事に季語を引立てています。

汐の香をポッケの底に磯遊び
冬菜抜くGのマークの野球帽
吹越や路地より匂ふ焼まんぢゆう

「汐の香」、貝殻を入れたポケットは汐の香りがしています。その汐の香が遠い記憶を呼び覚まし、きいち少年に出会うのです。「冬菜」は巨人ファンの少年の夢をずっと持ち続け、今も野球帽を身に付けているきいちさん、かっこいいと思います。

のどけしや居眠る母の手にバナナ
虫しぐれ臥せる母御の息さぐる
茶の花や母の生まれし藁葺き家
草萌ゆる父の墓より母よぶ声

「のどけし」はお母様がバナナを召し上がって、うとうとしておられる姿に暖かい時間が流れています。「母の手にバナナ」が胸に迫ってきます。「虫しぐれ」の句は、虫しぐれに他の物音が消され、お休みになられたお母様を気遣い、顔に耳を近づけておられる様子がよくわかります。「茶の花」の句、お母様の生家はお茶の垣根に囲まれた藁葺の家。大きな額に飾られた絵のようです。「草萌ゆる」はお墓に眠っておられるお父様が、お母様のお名前を呼ばれたのでしょうか。きいちさんは聞きたくなかったでしょうね。とても切ない句です。

過疎村に移動図書館秋の声
冬晴や訪ぬる友は千の風
過疎村に男子誕生初霞

「秋の声」の句は過疎村に週一度移動図書館が巡回して来ます。大人も子供もわくわくする様子が浮き上がっているようです。「冬晴」は彼の世から友が風になって会いに来てくれました。「冬晴」に救われます。「初霞」の句は過疎村に玉のような男の子が誕生し、霞を晴らすごと産声をあげたことでしょう。過疎村の宝です。

玄関に小さき靴や豆御飯
千枚の刈田の先に日本海
茶の花や農家カフェへと誘ふ道
踊の輪抜けて屋台の売子かな
直送便に乗せて能登より蛍烏賊
鐘楼門くぐり古刹の白牡丹

「豆御飯」の句は、用事を済ませ帰宅すると、玄関に可愛い靴がきちんと揃えてあります。遊びに来たお孫さんの声と厨からは豆御飯の匂い。心が和みます。「日本海」は前句と対照的な句。新潟の千枚の刈田から見下ろす日本海。雄大な景色に圧倒されます。小さな句も大きな句もきいちさんには自由自在です。「茶の花」は茶畑を抜け、カフェに辿り着けば美味しいお茶が待っています。「踊の輪」は、踊っているのはさっきまで屋台の売子をしていた娘？お客が増えてくると、やはり売子はいそいそと屋台に戻って行きました。くすっと笑える句です。「直送便」は上五が七音にも拘わらず、海の幸を運ぶスピード感があります。「鐘楼門」の句は、古刹の鐘楼門をくぐると白牡丹が目に迫ってくる、この感動。白牡丹が利いています。

きいちさんの句は特別難しい言葉を使わなくても、景がしっかりして心に残ります。基礎をしっかり勉強されて、努力を惜しまない日々の結晶だと思います。きいちさんのお人柄から、素晴しい句が生まれることを改めて認識いたしました。今後も楽しみにしております。最後にお母様ときいちさんのご健康をお祈り申し上げます。

六月号の巻頭句

季音雪　爪を噛む癖ある少女桜貝　永野史代

季音月　恐竜の骨を探しにこどもの日　鳥羽和風

季音花　囀や真ん中に街角ピアノ　日高道を

水明集　風に乗る微かな香り山桜　元田亮一

鼓笛集　すれ違ふ母校の制服桜咲く　越田栄子

山紫集　桃の花妻の骨とる箸長し　鳥羽和風

俳誌望見　染谷風子

「玉梓」　令和五年五・六月号　通巻一〇五号
主宰　名村早智子　発行所　京都市左京区

平成十八年一月、名村早智子氏が京都市で創刊。師系山口誓子。「『誰の心にも詩がある』生活に深く根ざした詩を詠む」がモットーである。（隔月刊）

主宰句「紙風船」一五句より

春の雪止むを待たずに日の射し来
生家見に行く山菜を採りに行く
紙風船突けば母来る伯母が来る
夫は網繕ひ妻は蓬摘む
芽起こしの風は川から加茂街道

第一句、古都の春の雪の光景。降り止む事を待ち切れぬように春の陽光が射して来た。場所は金閣か銀閣か。古都に本格的な春の到来はもうすぐだ。第二句、生家は空家であろう。家屋は時々空気の入れ替えをしないと傷みが進む。ついでに幼い頃遊んだ里山で山菜を摘んで帰ろうか。第三句、作者の幼少期の記憶からと思われる。それを今、目の前のものとして描き切っている。かな女の「羽子板の重きが嬉し突かで立つ」を彷彿させる一句である。第四句、対句と句またがりのリズムが心地好い。第五句、芽起こしの風が加茂川から吹いている。新芽は直に若葉となり、瑞瑞しい新緑になる。五月の葵祭が待ち遠しい。ここ加茂街道を絢爛豪華な「路頭の儀」の大行列が通過する。読み手を京都旅行へ誘う一句だ。

春の雪に始まり、加茂街道で終る十五句は、全句を通じて古都の春の息吹、生命が躍動しており、一気に拝読した。

真朱集　主宰選　二三名　各七句より三句

マフラーを取れば打首されさうな　蔵澄　茂
懸想文まだまだ恋の出来さうな　小寺篤子
海馬よりゆるぎ出したる日向ぼこ　高木理子

萌黄集Ⅰ　主宰選　三一名　各七句より三句

初笑長寿心得読みながら　小川美和子
金言を記しこれより初日記　土肥圭淑
残業の母待つ幼冬の星　堀川久美子

萌黄集Ⅱ　主宰選　八六名　各六句より三句

女子駅伝コンビニ前に倒れ込む　甲斐恵以子
春を待つ電話口から母の声　河崎千代
初凧の悠悠朱雀門広場　田路嘉代子

紹介した佳句は、いずれも作者の心を詠んだ句であり、人間のいる句である。同誌三八頁に囲み枠で、「ワンポイントアドバイス〝いま〟〝ここ〟〝われ〟をもう一度時間を止めて、目の前のものを見、自分の思いをそのものに託して詠む」との記事がある。主宰の会員指導の指標と思われる。作句の要締であり、我々も心して記憶すべき言葉である。

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　新　暦文

嬰児の摑むひと枝桃の花
宴終へ眠る古木や春深し
春風やワルツを踊るポリ袋
モンローに視線食ひ入る春の風
阿智村や寝ながら仰ぐ春北斗

梅澤輝翠

春祭終へて旅立つ無人駅
「細雪」はねて新橋桜散る
のどけしや土手の空ゆく雲ぽつと
落し文渡してほしや紋黄蝶
月虹や春の尼君糸競べ

森下山菜

荷風忌の電車は足と口とぢて
桜まじ妻の栞のページ繰る
傘の字の同行二人海市行く
春風や獣医学部に牛五頭
巻頭飾る陸寄居虫も木に登る

山岸久美子

深空をのぞかせ大樹浅黄色
逃げ水や遠くに城が浮かびをり
春夕陽幽玄の美に立ちつくす
老い深き犬と少年春の夕
よもぎ餅この香ぞ母の贈り物

さいたま　清水桂子

逃水を追うて八十路の青い鳥
逃水逃水げんまんしたの忘れたの
評判の小町娘の春日傘
琴の音のとぎれとぎれに春の夕
軽妙なヒップホップや石鹸玉

熊谷　越田栄子

女生徒の国歌独唱風光る
おすすめの筆文字太し桜鯛
食ひ初めの膳より大き桜鯛
餌ねだる馬にたぢろぐ春の牧
池の底とろりと温し蝌蚪生るる

遠道なれど桜月夜の裏通り
姿勢よき吾が学舎の松の芯
遺されし銅像永遠に春北斗
ゆつたりと時の過ぎゆく山葵沢
春の雨思ひ出たどる中華街

平塚　丸屋詠子

知らぬ間に着信点る朝寝かな
巫女の手に微かに触るる春祭
白魚や喉に広がる波の音
汐干狩り二の腕白き幼妻
花疲れ雑味の残る発泡酒

さいたま　元田亮一

花盛り三年ぶりのクラス会
詠まむかな百寿の一句春の夢
春雨に烟る皇居の二重橋
歌舞伎座へ後ろ姿の春日傘
菜の花やランドセルの子ポーズとる

反町　修

陽炎や坂ゆく車夫の比目魚筋
囀におまけ取り出す薬売り
逃水に一ついなく儀装馬車
逃水や右折禁止の交差点
息吹く子走り出す子ゐて風車

伊奈　菅原卓郎

終の地に桃の花咲く日和かな
花びらがひしめく水面春深し
もの言はぬリュックの水や春深し
大の字に待つ場所取りシート夕桜
田も畑も打ちて爽快春の風

さいたま　篠崎紀子

饅頭の焼印は鳥春の雲
散りたての桜の蘂に朝日影
陽炎や句碑の台座を歪めをり
怨念を語る素踊り春の夕
落椿五島に隠れキリシタン

池田珪子

春深し幹の膨るる音慥か
春深し二の腕に射す日の匂ひ
丸文字の手紙を濡らす花の雨
大寺の焚香揺する春の風
保護猫の腹を撫でつつ春の暮

皆川更穂

馬酔木咲く枯山水の礫光る
薬売りそろそろ訪ふや花馬酔木
語部の佳境に入るや春北斗
あいさつは先づ苗代の育ちから
対話型ＡＩに問ふ荷風の忌

岡田宣子

さいたま　菅原真理

春の海凪ぎ真つ白のヨット抱く
ゆるゆると膨らみ初むる春の海
吸ひ付きて花と揺るるや紋黄蝶
江戸風情のこる町並春日傘
長閑なりヤクルト売りの世間話

小林京子

花爛漫かつてこの地に近衛兵
朝寝する添ひ寝の方に足絡め
馬鹿ならず馬鹿に呑気な四月馬鹿
自らの影に驚く水澄まし
酒星や壺中の天の人となり

越谷　阿部幸代

逃げ水や英語講師のヒール音
春日傘傾げてふたり蔵の街
スマホ買ふスマホ嫌ひの暮の春
郵袋を仕舞ふ男の春夕べ
風光り神楽たけなは太刀の舞

さいたま　西幅公子

鳴き砂に浮かれて歩く春の海
日本背負ふコンビナートや春の海
のどかさや足裏くすぐる浜の砂
初蝶の園児にまじる鬼ごつこ
のどけしやサッパ舟ゆく蔵の町

さいたま　霜多光代

桃園に座して微睡む小さき旅
字余りの句に呻吟の春の宵
春の風早苗を揺らし渡りゆく
春風の里の香並べて吹き寄せり
春日傘傾けゆづる土手日和

村杉清吉

鳴門橋手摺に薄き別れ霜
午後三時蜂を休むる白シーツ
稲荷講開運祈る千社札
遠鳴りの梵鐘聞こゆ春夕焼
春雷や鳴る方角に雲立ちて

本橋稀香

涅槃西風閉店セールに人の列
ぞろぞろと新入社員黒スーツ
春昼の誰に手を振る選挙カー
朝寝して夢を反芻してをりぬ
ブーメラン届かざりけり春の背

杉戸　佐々木史女

長生きの話がはづむ日永かな
バスに乗り遥けき旅を春の夢
永き日や俳句作りを生き甲斐に
病棟の四方の山の春霞
玄関に南国の風君子蘭

若狭　山﨑郁子

集合は駅前広場風薫る
春霞スープに流す溶き卵
ぬかづけば善人となり涅槃寺
園児等の言葉弾けてつくしんぼ
春光や鳥のぶつかる硝子窓

さいたま　千坂平通

遠浅の入江の近く磯遊び
縄文の貝塚近き磯遊び
磯遊び上空はるかジェット雲
昭和去り働き蜂の今盛ん
尺八の音色共鳴五月空

飯田忠男

逃水や夢追ひ掛くる春の道
合評に讃評されし春の夢
逃水を追つかける子がこーろんだ
春夕べ妙義の襞の黒黒と
棒切れを放つて帰る春の暮

竹澤和子

黄砂の京都絶景かなと南禅寺
告白は砂の絵文字や春の海
江ノ電のひねもす先は春の海
長閑さや抹茶いただく尼の寺
渡し舟木の葉のごとし春疾風

さいたま　吉川拓真

花の雨愛がテーマの絵画展
春の絵に弓矢を焼ぶるクピドをり
清明やリアリズムとは神の技
春の夜や葉書絵の人自然体
珈琲に絵画の記憶浮かべ春

加藤でん治

終バスを逃して歩む春の月
風車戸口にこども一一〇番
お隣りは女系家族ぞ桃の花
白藤の光り一筋揺れにけり
こでまりの灯る門口入りにけり

川口　新井のり子

古ベンチ残花の下のプロポーズ
宮参りずつと寄り添ふ春夕焼
こんなにも谷中の日暮れ長閑なり
最後まで光まとひし残花かな
亀鳴くや朝のドリンク宮仕へ

さいたま　綿引まりこ

雑念を払ひて一句山笑ふ
躑躅濃しクレヨンを置く村のカフェ
陽炎を突き抜け走者生還す
沼底に神の足音春祭
棟上げの通し柱や春の山

さいたま　山戸美子

昇進の内助の功や春の風
無造作に内科入口春日傘
すれ違ひ掲げ傾げる春日傘
逃水や内紛続き死する街
犬一匹墓地で眠るや入り彼岸

小駒さち子

花馬酔木トンネルとなり友迎ふ
初写経心鎮むる花馬酔木
草のびる穀雨の雨はしづかなり
花吹雪母の最期を語りけり
木瓜の花棘ある枝にかたまりて

森美枝子

夕東風や火入れ間近き登り窯
雲雀東風リフトで目指す雲の上
房総の海なめらかに目刺干す
指栞ままに居眠り春灯
喉詰りせぬ様刻む蓬餅

森下美智枝

春日傘たたみて経を友の墓
白無垢を守る朱色の春日傘
魚飛ぶや真青の空と春の海
長閑なる海へくり出す巡航船
柴又を観て春の矢切の渡しかな

吉川　杉浦理恵

口ずさむアダージョ桜降り止まず
春眠や一駅だけの夢を見る
雑言にある真実や春の闇
春眠や待合室の白き壁
後妻業それもありかも四月馬鹿

さいたま　秋谷風舎

陽炎の道や聳立つ防波堤
頂に火の手を上ぐる躑躅かな
からからと進むリフトや山つつじ
菜園の割り振りせはし穀雨かな
まつさらな畝しばし待てまだ穀雨

小山あつ子

撮り鉄のカメラに写り込むミモザ
塀越しに隣家のミモザこんもりと
手術延期ミモザの花を買うて帰路
行く春やネガティブ気分ふり払ひ
春の夕近頃猫に似て気儘

石浜悦子

ほろ苦き日もありしかな蕗の薹
庭に咲く垂れ桜や息をのみ
たんぽぽの絮はいづこへ風まかせ
庭先にやさしさ運ぶ春の蝶
初恋の清らなるかな白躑躅

桃の花あと一息で寝返る児
たんぽぽの絮を吸ひ込む吾子の息
子供の日妻にせがまれ腰を上ぐ
今日は昨日の続き蛇穴を出づ
苗売場すぐに始まる畠談議

若狭　松村登美江

露天風呂娘の頬に春の風
駅を背にぱつと開くや春日傘
巣立鳥静かさ戻る軒の下
寝る児抱き桜蘂ふる散歩道
学舎にぽつんと巣あり巣立鳥

さいたま　橋爪さなえ

思ひ入る記念樹見上ぐ空駘蕩
釣船と波のシンクロのどかなり
のどけさや集ふ場となる診療所
長閑かさやロビーに響くヴィヴァルディ
露天湯はしばし貸し切り海のどか

所沢　飯室夏江

ルソンに残る父の思ひや陽炎へり
氷川さま囀頭上より降り来
上を向いて歩けば春の風強し
夜空仰ぐ何処かで春の天体ショー
「おぼろ月夜の館」で童謡歌ふ春

春日部　仲田利子

庭に来る鳥のつぶやき長閑なり
沈丁に風のまとはる通学路
日替りの散歩コースに愛づる藤
茶柱を言ひたくて「ほら」長閑なり
白子干二十数へる三才児

さいたま　緒方みき子

馬酔木咲く春日大社へ続く径
ささやきの径に出でたる春の鹿
鈴鳴らし馬酔木の花の通学路
春の雨苔の継ぎ目にしみ込みぬ
樹々達の色青々と穀雨かな

樋口元美

果てしなき野山を映す仔馬の瞳
朝陽浴び生(せい)を喜ぶ仔馬かな
母真似て薄き鬣振る仔馬
十キロの徒歩遠足は杖頼り
遠足やはしやぐ児童に横断旗

北出久美子

北の地に蝶追ひかくる花園よ
黄蝶むれ土手はにぎやかショータイム
待ちわびしサーファー叫ぶ春の海
竹林の葉のささやきにのどかさを
夕暮や釣り糸たれて長閑なり

小川洋子

さいたま　石関六弦

春暁や汽笛かさなる靄の船
行く春や双曲線を残す船
溢れたる重み引き受け花の山
雲雀止み動くものなき畦の道
夏近し放課後よりの逆上がり

鳴海順子

ペンライト振つて文字描く春の宵
春風にパーマのカール踊りをり
楡林窟に楡の木高く涅槃西風
さはさはと楡の木吹くや涅槃西風
保育園子等が手に手に母子草

寺町知子

花曇り苫屋の残る沼畔
背負ひ籠爺の後追ふ花曇り
セピア色のおかつぱ並ぶ花曇り
別れ道ランドセル跳ね桜舞ふ
犬ふぐりハミング誘ふ小道かな

東京　畑宮栄子

卯の花のゆかしくにほふ黒板塀
むべの花合点のゆきし名の由来
木瓜の花赤白桃とひしめきて
ずる休みあんずの花に迎へられ
自転車のペダルけり上げ風光る

さいたま　山下ユリ子

絵手紙に背をかがめゐる春日向
出番くる老いの繰り言ヒヤシンス
春日向トタンの屋根に猫眠る
春の髪風のかたちに踊りけり
金縷梅や鋸山の摩崖仏

岡田芳春

春筍や抱かるる土の柔らかに
親鳥の後に続く一羽あり
涅槃西風此岸に我の為せること
涅槃西風ラストステージの静謐
春愁や切れ味鈍く花鋏

森　和子

花ミモザ眩暈しさうな黄色好き
花ミモザ朗らほがらと風に乗る
バゲットを小脇に抱へ花ミモザ
うつすらと秩父連山鳥雲に
野仏の瞬きもせず鳥雲に

武田重子

桃色の百日稚や桃の花
水温む老婆の姉妹笑ひこけ
憧れの選抜の春打球音
黄水仙五感刺戟や空は青
愛で事に日々のお出掛け黄水仙

東京　柳父はる

連翹の燃ゆる黄の色乱れなし
賑々し連なるつつじ根津神社
草餅のみどり移して指の先
おもたせの香りいつぱい桜餅
がんがんと欅の芽ぶき押し来たり

宮代　関谷多美子

ラブラブの番の黄蝶空へ空へ
幼子の歩む前へと蝶舞ひ来
天才棋士六冠制覇木の芽時
満開の桜往時の師を偲ぶ
由比ヶ浜の吉屋信子や春日傘

さいたま　湯浅　和

食堂のおばちやん笑顔黄水仙
新しき未来へ一歩入学す
入学式母を探して後向き
打上げのシャンパンを抜き惜しむ春
大道芸の帽子に桜吹雪かな

高原和子

口遊む唱歌つぎつぎ山笑ふ
口笛を吹きたくなるよ山笑ふ
見渡せば堤はすべて花の雲
金色の光や桜並木道
夫とゆく桜吹雪の真中を

さいたま　後記朝香

春泥の靴跡土間のあちこちに
春泥の校庭や子ら鬼ごつこ
春泥を闊歩していくヒールかな
野を駆ける児の風車光撒く
風受けて虹色になる風車

鈴木香音子

をちこちにつつじ溢るる朝日和
剪定の木々迸しる春息吹
夢抱き夢に明けくれ春動く
朝戸風巣立の鳥を囃し立て
藤の花重きを助くるとなり人

横山礼子

老いらくの恋かもしれぬ花あせび
馬酔木咲く夫の悪口無尽蔵
馬酔木咲く今日は春日野明日は初瀬
田の水の青く盈ちたる穀雨かな
鉢植ゑの水吸ふ力穀雨かな

東京　山中いちい

春時雨窓のティンパニ密やかに
葉も草も馬も眼を伏せ春時雨
思ひ出を洗ひ流して春驟雨
春雷や遠く近くに礼砲す
帰り坂傘のない子に春時雨

梅雨晴やしりとり歌の母娘
葉桜や我が半生を振り返る
薫風や若きつがひの初営巣
小さき部屋母から届く夏布団
夜桜に誘はれふたり千鳥足

若狭　佐野友夏

山肌に緋色一筋芝桜
花の宴締めは屋台の中華そば
入学式両家の婆は一般席
白内障春の愁ひがさらに増す
居酒屋で友と汲み干す春の昼

さいたま　鈴木藻好

森行けば春告鳥の歓迎す
いつせいに幕のあがりし春や春
在りし友三葉つつじの三つ峠
念ずれば空も心も花衣
突然の訃報かげろふ遠ざかる

川島夕峰

日向ぼこ来るのは猫と風と雲
たんぽぽの絮墓石をすり抜けり
有名になりし孫あり吾亦紅
十センチ明けけし窓より春はくる
リハビリの友に見舞の風車

川村　治

風光る青き特急旅心
「真心」と熨斗に一筆桜餅
着流しの力士に会釈花の午後
飛花落花静かに仕舞ふお茶の会
春深し共に越えたる年度末

大阪　遠藤人美

玄関の入口せばめる桃の花
梅林やマスクはづして深呼吸
三代の雛をしまふ娘に感謝
亀鳴くやテレビの字幕に首のばす
風吹いて足元大樹の花の渦

藤沢　小島喜代子

車窓より桜吹雪や万華鏡
在りし日の糸たぐり寄せ桜並木
カラフルなランドセル行く新入生
花冷えにそつと抱くや母の背を
花冷や地蔵の頭巾新しく

和歌山　嶋田洋子

おさかなに傘差し向ける花の雨
臨終のほほにひと筋花の雨
木蓮の花の十字路立候補
くるくると塵と花片輪になつて
世を離れ野原の蝶と遊ぶ人

大阪　飯塚智恵子

和歌山　南條きわゐ

春眠や見たきテレビも夢の中
てまり歌流るるお城花蓆
鯉跳ねて川面に桜散りにけり
大輪のぼたんの占むる大広間
春眠や夜間のメール朝に見る

さいたま　落合和枝

長考と名人戦に花ミモザ
追つてみる届かぬ天光鳥雲を
路地に咲く振り向く髪にミモザ揺れ
従妹笑む鼻筋高し花ミモザ
鳥雲に岬を越える戯れて

鬼石　榊原聰子

春昼や居眠りのほほつつかれり
忘れずに燕元気に軒の巣に
宅配の届くを待てり春の月
菜種つゆ泥にまみれてユニホーム
花吹雪浴びてまつたり夢心地

草加　持永喜夫

思ひきり巣立ち行く鳥椎の空
姦しく我も我もと巣立ちけり
緑児は夜の音となり涅槃西風
妻のこゑたまに聞こえず涅槃西風

所沢　関根千恵

香水とエプロン着ける美学かな
太陽は微笑み返す白日傘
月下美人ガラスの靴の二十四時
消しゴムで夏の追憶消しにけり

さいたま　糸井しるく

娘ら跳ねて両手をぱちり花吹雪
足腰を畑にあづけて穀雨かな
群なして妖精の棘花馬酔木
弥栄や馬酔木の花の児らのごと

草加　吉田十三子

川渦の白さ増しつつ春惜しむ
春蝉の声天空に幕を張る
戸隠の忍者惑はす春の蝉
春惜しむ淡き色消す遊歩道

さいたま　小田美智

わくわくの種を選びて春惜しむ
何処まで声を探して春の蝉
春惜しみ張り付く花片石の上
自然界に太刀打ち出来ぬ卯月かな

藤沢　藤田寛二

閉ぢ籠り菌避け夫婦昼寝かな
春よ春歩道の塵を拾ふ妻
春の富士右に大山左に箱根

さいたま　藤川比早子

つつじ咲きあふるる光身にしむる
千駄木のつつじの坂にきつねゐて
警笛と陽炎のなか友来たる

作品評

山本鬼之介

逃水を追うて八十路の青い鳥　　清水桂子

逃水は陽炎と共に春の天文の部の季語であるが、どちらもその自然現象に誰しもが独特の神秘さを感じるのではなかろうか。筆者もその一人であり、立ち向かっても到底勝てる相手ではないこれらの姿に興味を持つ。

モーリス・メーテルリンク作の童話劇「青い鳥」は、貧しい家庭のチルチルとミチル兄妹が、クリスマスイブの夢の中で老婆に姿を替えた妖精ベリリュンスに頼まれて青い鳥を探す旅を続ける話であるが、幾分暑さを感じる様になった晩春の某日、外出先の路上で逃水に遭遇し、ふと常にはない好奇心を抱き、逃水を追って果てし無い旅に出るような気持になったのではなかろうか。夢のあるなかなか楽しい俳句である。

女生徒の国歌独唱風光る　　越田栄子

メジャーリーグで、女性がアカペラでアメリカ国歌を独唱したのが実に印象的であった。それと同様に、国内の野球の大会で、女子高生が国歌「君が代」を独唱したのを題材にしたものかと思う。多くの人が聞き耳を立てる広い会場で、澄みきった大空へ届けとばかりに熱唱した国歌に、作者もさぞかし感動したことであろう。季語「風光る」が、季節感と共に、若者達の純な気持を表しているように思える一句である。

春風やワルツを踊るポリ袋　　新　暦文

折からの強い春風によって路上に落ちていたポリ袋が舞い上がり、地に着きそうになったかと思うとまた上ってゆく。観ているとなかなかリズミカルで、自分もポリ袋と一緒に踊ってみたい気分になったようだ。優雅な三拍子が快い。

落し文渡してほしや紋黄蝶　　梅澤輝翠

「落し文」は、江戸時代に、筒状にした恋歌（恋文）をその相手が通りそうな場所にそっと置いておき、お目当ての人が拾ったら恋が実るという風習があったそうで、その虫の生態からこれがオトシブミ科の甲虫の名称になったという。

この俳句の句意からすれば、落し文を想いの人が直に拾うのではなく、仲人役とも言える紋黄蝶に望みを託しているのである。勿論、現実的には作者が落し文を書いて路に落としておくことはあり得ないのだが、長閑な春の陽射しの中をひ

らひらと舞い飛ぶ紋黄蝶の姿をながめていて、何時の間にかいにしえ人の心になっていたのであろう。

春風や獣医学部に牛五頭　森下山菜

掲句に刺激されて国内の獣医学部のある大学を調べてみたところ予想以上に多く、十八校あるのが判った。北海道大学と岩手大学は調べるまでもなかったが、東京大学や日本大学など、自分の居住地に近い大学の名前も出てきたので親しみが湧いた。

さて句のモデルとなった獣医学部は何処の大学であろう。牛五頭という数から察するところ、北海道や東北地方のような広大な敷地を有する獣医学部ではなく、どちらかというと、都会地にある大学の獣医学部のように思えてくる。五頭の牛と日々親しく接し、大事に管理している学生達の苦労と心意気が伝わってくる俳句である。

老い深き犬と少年春の夕　山岸久美子

少年と犬の出生時期が同じであったとして、春の日の夕刻に十四～五歳の少年が大型犬を散歩させている情景を想像すると、人間の年齢に換算した犬の年齢は九十四～五歳であり、「老い深き」の形容がぴったり当てはまることになる。こういう光景を時たま見掛ける機会があり、中型日本犬を飼っていた昔の日々を想い出す。

愛犬と一緒に育ちながらも、何時の頃からか自分を追い抜いてどんどん歳を取って行った愛犬への少年の哀惜の念が読者の胸に迫ってくる俳句である。柔らかな夕焼が老犬と少年を包み込んでいる。

姿勢よき吾が学舎の松の芯　丸屋詠子

久方ぶりに訪れた中学校か高校の敷地にある松の木であろうか。その頃は全く関心無であった松の木であるが、俳句を始めてから「松の芯」が季語であることを知り、今改めてそれと対峙している作者なのである。天を仰いで一本一本がきちんと直立している松の芯から、学生時代の想い出の数々が飛翔してくる。

巫女の手に微かに触るる春祭　元田亮一

春の例大祭で、巫女から渡された榊を受け取る際に、無意識に巫女の手に触れてしまったのだと思うが、胸の高まりは結構大きかったのではないかと愚考する。若い頃ならいざ知らずこの歳になってと、甘くほろ苦い思いに浸っている。祭囃子の笛と太鼓の音にその瞬間の余韻を募らせてゆく。

歌舞伎座へ後ろ姿の春日傘　反町修

中央通りの銀座四丁目交差点を渡り、晴海通りを進む女性。和装・洋装どちらでも構わないが、筆者の好みを言わせてもらえば前者である。春らしい色目の余所行きの着物に春コートを着た妙齢の女性が、和服の雰囲気を壊さない品の佳い日傘を差していま昭和通りを渡ろうとしている。歌舞伎座は目の前、作者の探訪はここで終了。

陽炎や坂ゆく車夫の比目魚筋　菅原卓郎

晩春の昼下り、陽炎盛んなる緩い上り坂を青年車夫が力走している。両脚の比目魚筋（ひらめきん）がはち切れんばかりに膨らみ、労働の厳しさと車夫の肉体美を如実に表している。驚くなかれ人体の筋肉の数は約六百個もあるそうで、その一つが、下腿後面にある比目魚筋である。なかなか勉強になった一句である。

終の地に桃の花咲く日和かな　篠﨑紀子

昨年晩秋に、永年住み慣れた邸宅から高層マンションに転居された作者にとって、終の地はマンションのある土地ということになるであろう。この句の桃の花が花瓶に活けられた桃の花と解すれば実生活を詠んだ句になり、桃の木に咲いている桃の花と解すれば、作者が憧れる桃林の景色につながる。何れにせよ、桃花は梅花や桜花とは異なる雰囲気すなわち幸せ感をもたらす花ではないかと思う。

饅頭の焼印は鳥春の雲　池田珪子

老舗の菓子店で作られている饅頭であろう。残念ながら店名は判らぬが、焼印の絵柄が鳥であることに親しみを感じる。季語が「春の雲」であることが、同じく春の季語である「鳥雲に」への昇華にも繋がり、情趣に富んだ作品だと思う。

春深し二の腕に射す日の匂ひ　皆川更穂

季語から判断して時季は四月であるから、射し込んでくる陽光には暑さはないが、夏の兆しを感じさせるエネルギーがあるのかと思う。二の腕は力瘤のできる場所でもあり、力瘤が折からの陽射しに応えているかのようである。

あいさつは先づ苗代の育ちから　岡田宣子

毎朝苗代の生育状態を見守りゆく農家の人達。支障なく大きくなっている苗を観ての安堵感が互いの挨拶として交わされるのである。まるで自分たちの子供の成長を喜び合うようで、実に柔和な雰囲気を醸し出す挨拶ではないかと想像する。都会にはない土の温かみを感じる挨拶である。

江戸風情のこる町並春日傘　菅原真理

歴史を刻んできた神社の鳥居や狛犬、寺院の山門や仁王像、商家の土蔵や築地塀など、江戸時代が肌で感じられる町並で、作者の住まいの近くでは城下町の川越が一番に浮かんでくる。その時代の女性は和紙を張った日唐傘を差したのであろうが、今は種々様々な布張りの日傘が町を往来している。和装で昔風の日唐傘を差して歩いたら、まるで映画のロケのようで目立つことであろう。

花爛漫かつてこの地に近衛兵　小林京子

昭和二十年八月の敗戦まで、近衛師団の司令部が皇居の中にあったので、本句の句意が納得できる。旧日本帝国陸軍の近衛兵は特別な存在で、徴兵に際し、本人の家柄や素行など、かなり厳しい審査が為されたと聞いた。むかし筆者が若い頃、水明の俳句仲間に岡村一郎というひとが居たが、彼は嘗ての近衛兵であった。作者も知人から近衛兵のことを聞いていて、何時の日か皇居内の桜を観に行った時にこの句が浮かんだのかと思う。「歩兵の本領」と題する古い軍歌があるが、一番から十番まである長い歌の出出しの歌詞が、「万朶の桜か襟の色」で、掲句を読んだ時すぐその歌が浮かんできた。

郵袋を仕舞ふ男の春夕べ　阿部幸代

郵袋は、郵便ポストの中に吊されていて投函された封書や葉書などの郵便物を収納する袋である。ポストに記されている予定の回収時間に赤色の郵便車でやってきて、手際よく郵袋を回収して行く。「仕舞ふ男や」ではなく、「仕舞ふ男の」になっていることに注目した。「の」は、その日の最終回収便の作業を終え、郵便夫がこれからプライベートの時間を迎えようとしている証なのである。

鳴き砂に浮かれて歩く春の海　西幅公子

かつて日本の海岸の多くが鳴き砂の浜辺であったそうだが、永い歳月の間に海浜の汚染や海岸の開発によって白砂青松の浜辺が減少し、現在残っている鳴き砂の浜は全国で三十ヶ所余とのこと。作者が踏んだ鳴き砂が何処の浜のものかは不明であるが、きゅっきゅっと鳴る砂の音が面白くて、幼児のように燥ぎ回る作者の姿を想像すると実に楽しくなる。

春日傘傾けゆづる土手日和　霜多光代

日傘を差して狭い土手の道を歩いていたら、向かいからの通行者と行き交うことになった。互いに春日傘を傾げ合う江戸仕種を実地経験することが出来た。

午後三時蜂を休むる白シーツ　村杉清吉

おそらく足長蜂であろう。洗い立ての白シーツに身体を休めている蜂の姿に、春の日の安らぎが感じられる。

水琴窟（水明集五月号鑑賞）

池田雅夫

ジャムの蓋なかなか開かぬ冬の朝　加藤でん治

トーストにつけるのであろうか。ジャムの瓶の蓋を開けようとしたがなかなか開かない。若いころとちがい、手指の力が弱くなったせいなのだ。それも「冬の朝」の悴んだ手ならばなおさらである。切実な問題として共感する。

ふはふはと傘に降りしく春の雪　霜多光代

「春の雪」は水分が多く雪片も大きいので重い。降るそばから消えることがあるが、意外と多く降り積もることがある。「傘に降りしく」であるから消えずに積もってしまったのだろう。見た目は「ふはふはと」だが、傘で重みを感じている。

目秤で選ぶ大根道の駅　竹澤和子

「道の駅」では地場野菜など新鮮なものが売られていて、どこの道の駅も人気となっている。冬の代表的な野菜の「大根」。形や大きさは同じように見えるが、少しでも良いものをと目を凝らし選ぶ。「目秤で選ぶ大根」に実感がこもる。

淡雪を溶かす煙草の煙かな　吉川拓真

かつて、映画では「煙草」のシーンが多用されていて、生活の中に欠かせないものだった。小池森閑は〈ゆげむりに即ち消ゆる春の雪〉と詠んだが、「煙草の煙」には脱帽だ。

春立つや葉かげ明るき築地塀　石関六弦

「築地塀」は瓦屋根をのせた土塀で、旧家などで見ることができる。由緒ただよう築地塀に立春の日が射し木々を明るく照らしている。築地塀という堅固な建物をとおして立春という季節の変わり目を描写しているところに感心した。

春光や「坊主ですは」と太公望　松村登美江

「春光」は輝かしい春の陽光の意に用いられることが多いが、本来は春景色の意がある。「坊主ですは」とは魚一匹も釣れないという意味である。「太公望」でも釣れない日もあり、それを屈託なく笑い飛ばす度量の大きさに感服した。

積ん読の数増すばかり春炬燵　湯浅　和

買って来た本を読まずに重ねておく。いつか読もうと思ってはいるが、「数増すばかり」である。「春炬燵」も仕舞うにはまだ早く、部屋の隅に寄せてある。その両者の共通性をうまく取り合わせたところがいい。ストレスのない日常を。

如月や身を切る風に襟を立て　石浜悦子

陰暦の二月。この月はまだ寒さがのこり、着物をさらに重ね着ることから「如月」と言われる。折からの冷たい風に思わず「襟を立て」首をすくめて歩いている。いつまでも続く寒さに、このまま暖かい春が来ないのではないかと嘆く。

摘草のかき揚げほのと癖のあり　緒方みき子

萌え始めたばかりの春の野に出て草を摘み、それを「かき揚げ」にして食した。ほんのりとした香りとほろ苦さがたまらない。「癖のあり」と一語で片づけるのはもったいない。「舌に鼻に」などの五感をくすぐる言葉をさぐってみたい。

歩のおそき我に合はせて春の月　染矢峯雄

おぼろにうるんだ月や花を照らしだす月など「春の月」は風情があり艶やかである。年々遅くなった歩みを気遣ってくれるのは奥様であろうか。感謝の気持ちを月に託しているのだ。まんまるの大きな春の月がくっきりと浮かんでいる。

数分を居眠りしたし春炬燵　南條きわゐ

春になっての炬燵は冬の寒いときとちがい、どことなく眠気をさそう。束の間の休憩にも「居眠りしたく」なるのだ。気持ちではなく、「数分の居眠りさそふ」などと推敲を。

北の果て硫黄の匂ふ風車　樋口元美

下北半島にある「恐山」を思う。比叡山、高野山と並ぶ日本の三大霊場の一つ。三途の川を渡り総門をくぐると硫黄がたちこめる境内に入る。岩場には水子供養のために「風車」がたくさん置かれている。風車の回る音が物悲しく聞こえる。

嫁ぎゆく娘の肩に春の雪　北出久美子

「娘」を「むすめ」と読んでいることに感心しつつも、ここは「子」が適切と思う。「嫁ぎゆく子の肩に春の雪」で字足らずとなる。晴れの門出にふさわしい春の雪になるように工夫したい。たとえば「涙かくし嫁ぎゆく子や」のように。

北国を指す道標に春の雪　篠原さよ子

「北国」から「雪」を思い浮かべる。北国街道、奥州街道など北国へつづく街道の「道標」。その「みちしるべ」に淡い「春の雪」が降っている。「道標に」を「道標や」として、「切れ」の効果や微妙なちがいを味わいたい。

駆け下る駅伝日和風光る　寺町知子

感覚的な「風光る」から、うららかな景色に、吹く風さえも光っていると感じられる。駅伝には坂が多い。うららかな日和の心地よい風が「駆け下る」駅伝選手を見舞っている。

鼓笛集

大村節代　選

薫風や川の字に引く三輪車
影止まり目の合ふ玻璃戸守宮かな
週末のあぢさゐ生き生き今朝の雨
加藤でん治

手をひかれ護摩の火渡り山若葉
石楠花のときめく御廟高野山
禁制の解かれし初夏の女人道
阿部幸代

金の波寄する夏暁銀の浜
はちきんのぎらりと鰹さばく出刃
土佐の暑に絵金の緋の芝居絵や
横山礼子

菖蒲湯や顎まで沈み息を吐く
柏餅帰らぬ子を待つ台所
ベランダに一尺五寸の鯉のぼり
山中いちい

大空へ伸ぶる新樹の森を訪ふ
ナイターやヒットに皆の箸止まる
景品に釣られアロハが立ち止まる
篠﨑紀子

夏浅し中州屋台の灯の三つ
撫牛の櫛田神社に浅き夏
夏浅しママの博多弁艶めけり
北山建治郎

夏安居の鐘の響きや知恩院
麦秋や尖塔たてる地平線
母の日やひとり欠けたる贈り主
反町　修

芍薬の蕊の香りに心寄す
自問する「母のつとめ」を母の日に
誘はれて行く「マリオ」の映画こどもの日
綿貫ひさの

打掛けのはにかむ顔や春の燭
手水舎に袖絡ぬるや初袷
紫陽花や万感胸に列車待つ
武田重子

豆の花ひとりでおつかいできるかな
山城の見えゐて遠し山桜
遺跡てふ穴のいくつかたんぽぽ野　　森美枝子

妹の靴揃へる兄や風薫る
花蜜柑薫溢るる伊豆の海
荒磯に流るる靄や夏の暁　　秋谷風舎

大藤の長き年月命込め
十薬や祈りにも似し白き花
てふてふや手を伸ばす子の虫嫌ひ　　畑宮栄子

鼓笛集巻頭（六月号）

私の好きな一句（自句自解）

野を渡る風はさみどり新茶汲む　　越田栄子

新茶の季節は野も山も清清しい。色を楽しみ、香を愛で、味わう新茶は格別である。
祖父の在りし頃、お茶を作るのは祖父の仕事であった。摘んだ茶葉を蒸し、炭火の焙炉で揉みながら乾燥させお茶に仕上げていく。
当時は何気無く飲んでいたお茶であったが、できればもう一度そのお茶を味わってみたいと思う。

鼓笛集作品評

大村節代

薫風や川の字に引く三輪車　　加藤でん治

川の字は「川の字に寝る」の慣用語に引き摺られていた。なるほど三輪車の車輪いやタイヤ跡も川の字である。見なれた三輪車を川の字と詠む、小さな発見だと思う。

手をひかれ護摩の火渡り山若葉　　阿部幸代

無病息災、家内安全等を祈りながら行者に続いて、熾の上を渡る。かつては手を引いた子に、今は手をひかれ渡っている。

はちきんのぎらりと鰹さばく出刃　　横山礼子

広辞苑によると、はちきんは「八金」と書く。（高知県で）女性が向う見ずで勝気であること。また、そのような人とある。なるほど掲句が分かった。この場合、八金と書き、ルビを付けたら如何。

網野月を 選

山紫集

風車「夕やけこやけ」の鳴り渡る　町野広子

柴又に雪駄響かせ風車　森美枝子

双子には何でも二つ風車　石川理恵

風車武蔵は察す身の危険　田中章嘉

——以上特選

小走りで試してみたる風車　高島寛治

一斉に回る地蔵の風車　髙橋満耶子

風車尖りし口の吾子と母　武田重子

風化する地蔵の目鼻風車　鳥羽和風

アルバムはセピア色なりかざぐるま　飛永　鼓

かざぐるま駆ければ廻る子の笑顔　仲田利子

菜園の畝にさしたる風車　越田栄子

風車走れば青い音が鳴る　染谷風子

縄電車しんがりが持つ風車　丸山マスミ

優しき息には優しく回る風車　鈴木玲子

子には子の背丈の風や風車　横山君夫

投げるならくノ一気取り風車　山中いちい

思つきり頬膨らませ風車　鳴海順子
人力車回して走る風車　南條きわゑ
風車水子に聞かす子守唄　西幅公子
秩父札所廻る数百風車　野口和子
風車売遠き記憶も手渡しぬ　野田静香
風車潮風受けて空回り　野村美子
風車頬いつぱいにふくらませ　畑宮栄子
力車マン風車つけひとはしり　原田秀子
息続く限りに廻る風車　樋口元美
我先に走り出す子ら風車　日高道を
風車ひとの言葉の裏表　檜鼻ことは
風車つけ乳母車こ走りに　福田千春
あをぞらの色足し廻る風車　藤澤喜久
背の児をあやす長男風車　保坂翔太
風車吹いて尖んがるおちよぼ口　曲淵徹雄
水子地蔵の夕べ真赤な風車　正木萬蝶
風車かざせば止みぬ泣きじやくり　松井由紀子
風車嵩ある父の肩車　松宮保人
子と遊び風とも遊ぶ風車　松本光子
茶屋に客よぶフル回転の風車　丸屋詠子
幼子の走り廻るや風車　宮崎チアキ
前向いて生きるしかなし風車　元田亮一
独り身の遊ばせ上手風車　本橋稀香
風も子も遊び盛りや風車　森　和子

小児科のナースの部屋に風車　森川義子
花月堂の壁一面の風車　森下美智枝
風を欲る水子地蔵の風車　森本早苗
風車とあめ玉を手に幼女くる　山下ユリ子
風なくば回れぬ無念風車　湯浅　和
風車憂ひを吸ひて散らしけり　横山礼子
かざぐるま風は正義と限らない　青木鶴城
風車は大人の玩具かもしれぬ　秋谷風舎
廻らねば頬膨らます風車　新　暦文
空を見て誰のお守や風車　阿部幸代
風車供へ浄土の子をあやす　荒井倶子
ベビーカー双子が燥ぐかざぐるま　飯田忠男

物理とはもののことわり風車　池田珪子
廻るほど持つ手に力風車　池田雅夫
肺を病む夫にみやげの風車　石田慶子
風の意に添ひて遅速や風車　井関礼子
母の手より風をもらひし風車　井上燈女
老小の手作り映へる風車　上戸千津子
水子地蔵色鮮やかな風車　内田恵子
風車持て妻児駆けてく吾の胸に　梅澤輝翠
壊されし大地に赤き風車　梅澤佐江
御巣鷹の風まつすぐに風車　大塚茂子
ひとつ回れば次次回り風車　大場順子
風待てど廻りそこぬる風車　岡田宣子

風車岩に飛びのる園児達　葛城千世子
ねむる子に風車止み風の止む　加藤でん治
風車江戸時代から回つてる　川村　治
良く廻る水子地蔵の風車　熊倉千重子
風車翳し追つ掛け鬼渡し　河野はるみ
親と子の手作りうれし風車　小駒さち子
肩車の子の手にまはる風車　後藤綾子
かざぐるま風の呼吸を聴ひてゐる　小林京子
捨てざりしペットボトルを風車　近藤徹平
風車水子地蔵の身ほとりに　榊原聰子
十字架の墓は幼か風車　佐々木史女
風車水子地蔵は伏し目がち　笹本啓子

風車泣いても笑つても回る　篠崎紀子
かざぐるままはるまはるよまだまはる　渋谷きいち
次々と風を彩る風車　下川光子
泣いた子の機嫌取るふり風車　佐藤克之
風止まば人なほ恋し風車　菅原卓郎
一瞬の風をつかまへ風車　菅原真理
風車くるり下町昭和めく　杉浦理恵
ウォーウォーと吠ゆる海風風車　鈴木藻好
幼子も悲喜あり赤き風車　関谷多美子
賽の河原不意に鳴り出す風車　瀬戸雄二郎
妙齢や水子地蔵の風車　反町　修

山紫集作品評

網野月を

風車走れば青い音が鳴る　染谷風子

中七の「青い音」とはなんであろうか。「青い」は視覚的修飾であって、ふつう聴覚の修飾には使用しない。俳句では、青葉若葉に関連するものを表したり、植物の未熟の稔りを表現したりする。掲句の「青い音」は具体的に「風車」の色合いを表しているのかも知れない。そうだとしても、この色合は作者の心象を大いに刺戟して「青い」と見定めるまでになったものだと思えるのである。

縄電車しんがりが持つ風車　丸山マスミ

「縄電車」の最も重要な役柄は先頭の運転手であり、二番目の主役は車掌であろう。車掌は電車ごっこにおいては、裁き役なのである。何といっても台詞が多い。ガキ大将で腕っぷしの強さを誇る子は運転手役であろうが、ごっこの面白味の分かる知能派は車掌役を望むかもしれない。そこでその車掌役が「風車」を片手に持って離さないのである。ごっこに花を添え、文字通り色を添えている。掲句には「で」「が」「が」「ざ」「ぐ」と濁音が多い。中でも「が」が多用されている。この「が」は「が［ga］」ではなくて鼻濁音の「が［ŋa］」なのである。本来の日本語の濁音の発音に還れば、鼻濁音「が［ga］」の仕様に拠って美しい音色の味わえる句になっている。

優しき息には優しく回る風車　鈴木玲子

菜園の畝にさしたる風車　越田栄子

いかなる経緯で畝に風車が刺されたのかは分からない。情報がないのだ。たぶん家庭菜園のようなさほど大きくない菜園の畝に風車が刺し込まれて、風に回っているのである。それだけなのである。シュールな景と受け止める方々もいるのであろうが、決してシュールな景ではないのだ。作者は確実にこの景を目の当たりにしているのだ。作者はこの景を受け容れて、若干の驚きと戸惑いとを感じて、偶然に創り出されたこの景に感動さえしているのである。いわゆる超越者が創り出したのかも知れない。とすれば、P．ゴーギャンの『我々は何処から来たのか、何者なのか、どこへ行くのか』と同型の表現方法なのである。掲句の場合は「何者なのか」だけは「風車」と判明しているのである。

色々と考えている内に、風車を拾った御仁が、多分幼子が落としたのだろうと推測って目立つように近場の畝にさしておいて呉れたものであろうか?と考えるようになった。

言い得て妙、秀句です。「優し」のリフレインも成功しているし、何といっても作者の想いがストレートに伝わってくる。「風車」の季語だからでしょう。

子には子の背丈の風や風車　　横山君夫

「風」というのは不思議なものである。その時空間に拠って濃さというか、強さが異なるのである。そうした「風」の不思議を可視化した「風車」の質感と元となる「風」の不思議さを絡めている。中七の「……や」切れが全体の構成を成立させている。

投げるならくノ一気取り風車　　山中いちい

御存じ水戸黄門の密偵、風車の弥七を彷彿とさせる。ただ掲句では「くノ一」とあるので、由美かおる扮するかげろうお銀のことを作者は擬しているのであろう。一家に一台茶の間にテレビのあった時代を想って懐かしい。これは家族全員が同じイメージを共有していた時代なのである。

風車「夕やけこやけ」の鳴り渡る　　町野広子

この曲は中村雨紅作詞、草川信作曲の「夕焼け小焼け」のことであろう。「夕焼けこやけ」の「こやけ」は「仲良しこよし」のように語調を整えるものという説があるようだ。言語学的には無論そうなのであろうが、文学的には最盛期の夕焼け時を過ぎて少しずつ暮れ泥む時を「こやけ」と表現して、夕焼の色合いが僅かに残っている頃合いを言う、と解した方が趣があるように筆者は考える。掲句もその延長線上で解せば、「風車」遊びに高じて暗くなるまで遊んでいる子供たちの景が思い浮かぶように思うのである。

柴又に雪駄響かせ風車　　森美枝子

こちらは車寅次郎を連想してしまう句である。「男はつらいよ」は映画であって、映画の中の景は俳句に成らないのだが、渥美清その人が、そのまま現実に存在しているように大方の日本人は寅次郎を理解してしまっているようにも思うのである。たまには好いでしょう。

双子には何でも二つ風車　　石川理恵

年齢の違う姉妹でも兄弟でも同じく個数を揃えるものである。況してや双子なら尚更であろう。二歳、三歳までなら良いのであるが、物心つく頃合いには、親は真っ先に持ち物に名前を書いたりするようになる。一苦労があるのだが、一時のことで、子供たちが大人になった時には嬉しい思い出になっているものだ。親の右手と左手、これには困り果てたものだ。俳句における事実の重さほど、読み手の心を捕らえるものはない。掲句は将にその一句である。

風車武蔵は察す身の危険　　田中章嘉

「武蔵」は二天一流の新免玄信こと宮本武蔵のことであろう。とすれば、第四十六巻「火の巻」の章の一つである。もちろん吉川英治作である。遊び心の横溢した一句である。

若狭句碑巡りツアー記

青木鶴城

五月二十九日総勢二十九名を乗せ、浦和の玉蔵院前を若狭へと出発。予報通り雨の道中となったものの、途中のサービスエリアでは雨が止んでくれる幸運。新緑の山並みに沸き立つ雲の幻想的な景観に感嘆しながら、出発より九時間、約四十分程度の遅れで無事ホテルに到着。きらら温泉ホテル水月花は三方五湖のひとつ、水月湖に面するレイクサイドホテルで、素晴らしいロケーション。六つの円卓での夕食の宴は、美味しい地酒に最高の盛り上がりを見せ、締めは今回初お目見えの北山建治郎氏の浦和高校応援団締めと、本旅行の実行委員長五明昇氏の長野高校応援団締めで閉会。

翌三十日は、先ず観光船にてレイククルーズ。水月湖を約四十分間の周遊で、船上は少し肌寒い朝であった。船を降りると、鳥羽谷俳句主宰の檜鼻ことは氏のお出迎えを受け、鳥羽公園へと先導を頂く。

鳥羽公園では、鳥羽谷俳句会の皆さんがお揃いで、笑顔笑顔の再会が印象に残る。島津初花さん直筆の句碑俳句を記したメモを片手に、宇田翠保、澤本知水、山本嵯迷、島津城子の句碑を鑑賞。途中の坂道には、数日前に敷き詰めたという砕石舗装がされており坂道も不安なく感激。全員での記念写真の後、熊川宿へ。

熊川宿は、京都と小浜を結ぶ鯖街道随一の宿場。建物の改築等保存規制が敷かれているため、昔を留める景観が素晴らしい。「葛と鯖寿司の店　まる志ん」で昼食。徳法寺には家康が信長に従軍し越前朝倉氏との戦いの折に宿泊し、腰を掛けたという「家康腰掛の松」があった。

若狭瓜割名水公園には、初代長谷川かな女、二代目長谷川秋子、三代目星野紗一と明世の句碑があり、立派な存在感。名水百選に選定された瓜割の滝、お堂を囲むように四国八十八カ所を巡る石仏群（高さ五十センチ程）が祀られている太子堂もあり、食後の腹ごなしには丁度良い坂と階段。

明通寺は、坂上田村麻呂の創建で、本堂・三重塔が福井県唯一の国宝。石の階段を昇り詰めると僧に本堂へと誘われ、寺の歴史や薬師如来像などの説明を受ける。足腰の弱い人には少々辛い階段であった。

奈良東大寺二月堂の「お水取り」の「お香水」を送る「お水送り」を行う神宮寺は、時間の関係で素通りし、「送水神事」を行う鵜の瀬へと向かう。毎年三月二日に神宮寺より二キロメートルの松明行列で運ばれた「お香水」を鵜の瀬より流すと十日間をかけて東大寺二月堂の「若狭井」に届くと言われている。鵜の瀬には若狭井へ通じるという穴があった。

若狭彦神社は若狭第一の古社で若狭姫神社と共に若狭国一之宮。樹齢千年にでもなろうかという大木が生い茂り、その空気に神のパワーを感じると共に若狭の国の文化を肌で感じる場所でもあった。

小浜若狭湾近くのホテルせくみ屋は小浜随一の大きなホテル。宴会場には若狭水明会の八名が合流され、ここでも久々

の再会に話の花が咲いていた。鳥羽和風氏より、先日の「野の花文化賞」の受賞報告と共に、句碑の清掃や公園の木々の剪定を手分けして実施したこと、砕石舗装を市議会と交渉の末に実現した旨のご挨拶の後、檜原ことは氏の乾杯の音頭で宴が開会、賑やかな歓談の後、楽しい酒宴が終了となった。

三十七士薄暑若狭の夜の宴　鬼之介
万緑の若狭よ風の瑞瑞し　栄子
若狭路の兄弟句碑やあいの風　桂子
湖畔の宿の朝の散歩で青き梅　美智枝
水月湖に太古の地層風光る　節代
三方五湖湖上の巣追ふ夏燕　理恵
押鮓のきつちり旨し鯖街道　かつ子
御食国（みけつくに）地産地消の夏メニュー　マスミ
熊川宿の夏水速し芋水車（いもぐるま）　道を
籠背負ひて若狭女（め）夜行の鯖街道　建治郎
水走り夏草光る鯖街道　幸代
ふたたびの瓜割の滝青嶺かな　茂子
山滴る八十八箇所ひとくるめ　和葉
水明や句碑を巡れば滝の音　風子
滝音を聴いてかな女の句碑なぞる　徹平
磴道に苔むす寺や麦の秋　卓郎
今先達と吟行めくや初夏の句碑　公子
先代の功徳巡る梅雨の句碑　久美子
晩鶯や堂堂とひそと明通寺　萬蝶
五月雨や手さし出さるる明通寺　チアキ
本堂の前に靴三十足若葉風　徹雄
せせらぎの聞こゆ鵜の瀬や桐の花　美子
胸に沁む若狭訛りやみどりの夜　昇
北前も停りし浜か夏の凪　忠男
朝凪や島影迫る若狭湾　宣子
ささ漬の樽に杉の香若狭初夏　喜恵
再会の破顔それぞれ若狭首夏　鶴城

熊　川　宿

鳥羽公園

今回の句碑巡りツアーを歓迎して頂いた、鳥羽谷俳句会の皆様、特に各観光地への先導を頂いた檜鼻ことは氏へ御礼を申し上げると共に、企画・準備並びに実行委員長を務めて頂いた五明昇氏に一同心より感謝いたします。

緑さす若狭へ絆の旅

句碑めぐりバスツアー顛末記

実行委員長　五明　昇

水明創刊八十五周年記念の「島津城子句碑」建立を契機に行われた前回の句碑めぐりツアーから六年が経過した。その後水明創刊九〇周年・通巻千百号、鳥羽谷通巻二百号・野の花文化賞受賞などの慶事が相次ぎ、また両結社に新主宰が誕生したことと相俟って、会員の中にツアーの再催行を望む声が高まってきた。そこで令和五年度事業の一環として「若狭句碑めぐりバスツアーＰＡＲＴⅡ」が計画され、小生がその旗振り役を命じられた。

ツアーの概要を決定、旅行社に旅程表の作成と費用見積りを依頼したのは十二月初旬。この時点で訪問先の鳥羽谷俳句会へも計画の概要を示して協力を要請した。『水明』誌には一月号から四月号までツアー案内を掲載する一方、二月号には主宰の「若狭は水明のふる里」、青木鶴城氏の「若狭ツアーの魅力紹介」の記事を添えて、会員募集に全力を挙げた。

会員二十八名に特別参加の二名を加えて三十名の催行人数が確定したのは四月上旬。これを受けて鳥羽和風鳥羽谷俳句会会長、檜鼻ことは鳥羽谷主宰に正式にツアーへの支援をお願いした。五月上旬には全ての準備作業を終え、最終実施計画の「ツアー要項」が常任運営幹事会で承認された。

こうして迎えた五月二十九日は、奇しくも六年前のツアーと同月同日であった。浦和・玉蔵院に集結した参加メンバーは勇躍、若狭に向けて出発した。浦和から若狭までは途中休憩を挟んで片道九時間余りの行程だが、若狭への期待に胸を膨らませ、一同元気で宿入りできたのは幸いだった。

ツアーのハイライトとなる三十日の句碑めぐりコースは、檜鼻主宰が終日に渡ってマイカーでバスを先導、案内役を務めて下さった。また最初の訪問地の鳥羽公園には鳥羽谷俳句会の皆さんが大勢で一行をお迎え頂き、忽ち歓談の輪が広がった。さらに夕刻のホテルせくみ屋での合同懇親会には若狭側から鳥羽和風、檜鼻ことは、宇田白鷺、松宮保人、原田自然、島津初花、飛永鼓、山﨑郁子の各氏が参加され、再会を喜び合う楽しい宴が遅くまで続いた。

三十一日の最終日は、一路浦和を目指す長途の復路となったが、夕刻には一同元気で浦和・玉蔵院前に帰着した。「水明晴」とはいかなかったものの三日間大きな天気の崩れも無く、一同元気で帰宅できたことはまさに天恵と言うしかない。

今回のツアーは、若狭の美しい自然や輝かしい歴史、御食國の豊かな産物、温かい人情に触れる「感動の旅」であった。また同時に、水明の確かな師系や黎明期を支えた先達の功績、それを護る若狭の仲間の変わらぬ友情に思いを致す「気付きの旅」でもあった。このツアーが水明・鳥羽谷の新たな連携の跳躍台となることを信じて止まない。一行を温かく迎えて下さった鳥羽谷の皆様に心から感謝申し上げ、筆を擱く。

若狭（先師）の句碑

島津初花　筆

山女やく煙入りぬ花しぐれ　知水
沖の石にかざす照葉ぞ山帰来　嵯迷
昭和四十六年　鳥羽公園

犬吠ゆる冬山彦になりたくて　秋子
昭和四十九年　瓜割公園

ねばりひきでもあろかと田何ふの初蛙　かな女
昭和五十六年　瓜割公園

渡り鳥消えたるあとの還餞　紗一
瓜割の滝は潔あり新松子　明世
平成十五年　瓜割公園

穴を出て峡の清水をにごすまじ　翠條
平成二十年　鳥羽公園

うめのはな吾生涯の花なれや　城子
平成二十七年　鳥羽公園

追悼
齋藤愼爾
齋藤 齊／奥坂まや／関 悦史
仙田洋子／高野ムツオ／筑紫磐井
冨士眞奈美／星野高士／吉行和子
黒田杏子
神野紗希／髙田正子／照井 翠
坂本宮尾／西村和子／細谷喨々
宮坂静生／山下知津子

高橋睦郎　特別作品40句

巻頭三句
蓬田紀枝子
伊藤政美
恩田侑布子
江崎紀和子
楠田哲朗
山本　潔

今月の華
井上泰至
野口る理

俳句と短歌の10作競詠
中山奈々
山木礼子

好評連載
成瀬政博　とりあえずの日々
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西 朋　俳句へのまなざし
神作研一　てのひらの江戸—古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2023年8月号
7月20日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木和子　報

五月雨や一草庵のりんの音　拓真
細細と太太と生き蚯蚓かな　〃
五月雨に映ゆる花訪ふ切通し　稀香
「細君」と言ふ古風な響き夏薊　京子
初夏や青き香のたつ竹細工　由紀子
——以上特選
婚礼を祝ふ五月雨涙雨　理恵
五月雨やお濠の内の天皇家　延昭
さしかけらるる傘明るうて五月雨　由紀子
連休終へ車内爆睡さみだるる　京子
細頸の解れ毛ゆらす青嵐　はるみ
夏に入る細きモデルのポスターかな　チアキ
細工上手な少年の手に夏来たる　順子
権勢を誇りし天守さみだるる　喜恵
細腕の呼び込む暖簾初松魚　徹平
五月雨や消息分らぬ人を待つ　節代
若葉風老細胞を一新に　稀香
円窓(まるまど)の切り取る庭のさみだるる　マスミ
乱れつつされど細やか暑のアート　拓真
五月雨や明るき色の服選び　和葉
早立ちの目覚めに聞きし五月雨　和子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城　報

妖怪の如く雪渓谷を這ふ　峰雄
ふはふはの夏雲溶かす水平線　敏江
図書館の窓に三社の御輿待つ　竺仙
雪渓に立つや少女のゆれる足　リコ
群青の空に続けり大雪渓　みどり
雪渓や踏み跡頼るトラバース　鶴城
融解になほ雪渓の閉ざすもの　〃
——以上特選
苗札の並ぶ窓辺のハーブ園　いちい
雪渓を彩るヤッケ一列に　敏江
雪渓を横目岳人ただ歩む　リコ
苗札の文字のくねりぬ糸瓜苗　竺仙
食用と知らぬ子の居て糸瓜苗　峰雄
雪渓に挑む男等赤青黄　みどり
浮苗や風来坊にもある矜持　鶴城

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

卯波美し八方玻璃の美術館　順子
鑑真の越え来し海や卯月波　〃
越前屋はいつも悪人葱坊主　萬蝶
灯台の死角に卯波胸騒ぎ　〃
子供の日老いたる父の日とも思ふ　喜久
韃靼の風に逆巻く隠岐卯波　昇
卯波立つ神代の島の里神楽　〃
——以上特選
卯波寄す沖の島島見え隠れ　雅夫
テトラポットに砕けて白き卯波かな　康世

禅海の洞門今に滴れり　順子
卯波立つ五人男の勢揃ひ　萬蝶
銀鼠の卯波の責むる隠れ岩　徹雄
大卯波島陰に入る漁師舟　星歩
沖眩し追伸二伸と卯月波　喜久
夜半の月ささやき止まぬ卯波かな　理恵
紀国に木々の騒めき夏近し　昇

第四例会（浦和）

境　延昭
石井喜恵　報

テラスから埋まる五月の喫茶店　延昭
棕櫚の花物干し竿に菜つ葉服　〃
寮生の干すシャツ数多五月来る　寛治
雨後の樹のいよよ耀く五月かな　由紀子
花棕櫚の黄金垂るる異人館　順子
竹林の風と添ひ寝や旅五月　暦文
田を走る水生き生きと五月来る　喜恵

——以上特選

五月風しばし筆擱く写経の間　マスミ
花棕櫚や遠流の僧の小さき墓　昇
草枕五月の風を胸深く　修
石塀の上の曇天棕櫚の花　光子
棕櫚の花先島諸島浪高し　翔太
棕櫚の花発酵しているパンの生地　恵子
菊坂の風は明治よ五月来る　寛治
誰も来ぬ五月の泉あふれゐて　でん治

我に翼あらば舞ひたし五月の野　順子
水切りの小石の飛翔五月来る　延昭
午後の陽にすこし重たげ棕櫚の花　由紀子
踏み入りて五月の風を富士樹海　玲子
棕櫚の花膝の重たき女坂　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ　報

柏餅剥がし損ねし葉を恨む　理恵
夏がすみ古城一帯つつみけり　水尾
富士の五合目眼下をかくす夏霞　美佐尾
見えさうで見えぬ鳥影夏霞　宣子
夏がすみ魁夷の白馬現るや　佐江
夏霞池塘を包み込む静寂　〃

——以上特選

夏霞戦場ヶ原席巻す　玲子
柏餅円きほつぺは今二歳　はるみ
鐘一打山にこだまし夏霞　義子
かしわもち苦労も甘く懐かしく　理恵
成長を願ふよもぎの柏餅　美佐尾
一湾の先に大島夏霞　水尾
給食のメニューの華よ柏餅　宣子
両の手に握る未来よ柏餅　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子　報

初恋も大人の恋も牡丹の黄　月を
天仰ぐこと無き路地の鯉幟　慶子
白牡丹やさしい嘘の終はる時　〃
静謐な時を纏へり夕牡丹　佐江
天心を貫く想ひ夏はじめ　鶴城
潮風をいなす牡丹や浜離宮　理恵
長谷寺や牡丹に斜面人に廊　ひろこ

——以上特選

牡丹生け茶事の真似事してをりぬ　はるみ
観音の天衣に遊ぶ風五月　マスミ
夏雲の膨るる下の散歩かな　星歩
曇天の地に貼りつきし杉落葉　ひろこ
遺伝子は完璧なのに富貴草　鶴城
月のささやきそつと伝へし卯波かな　理恵
天地の確かな息吹田植終ふ　佐江
牡丹や花蕊に虫を遊ばせて　千春
嫁ぐ子と同じ齢に白牡丹　京子
杖きらふ母のはじめて牡丹園　慶子
麗人の泪は甘露夜の牡丹　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗　報

秘密基地戦の合図草の笛　ゆら女
一声は鳥か土手ゆく草笛か　〃
草笛を吹きくれしひと征つたきり　和子
草笛や遠きかの日の戀の色　洋子
聖堂の絵ガラス映ゆる新樹光　玲子

夢追ひつ八十路に別れ聖五月　千津子
風薫る母と連弾駅ピアノ　道子
漆器買ふ会津十楽八重桜　早苗
砂塵舞ふ大内宿を鯉幟　〃
若葉照る飯盛山に跪く　〃

——以上特選

母の日や孫に持たさる騙し舟　ゆら女
草笛やあの少年と遠き日と　洋子
ジャズ流る旧居留地の薔薇の門　玲子
草笛の途切れとぎれの唱歌かな　早苗
草笛のピーとも鳴らず風走る　千津子
髪洗ふ朝一番の仕事終へ　千世子
遠来の友やさしかり草の笛　きわゑ
草笛や少し本音を吐き出せり　満耶子
草笛の子らへ一曲リクエスト　和子
野仏の居眠り覚ます草の笛　道子

昔話あれこれ28

小楯の連、二王子のための仮宮造る

小楯の連はこの歌を聞き椅子から転げ落ちるほど驚いて二王子を左右の膝にお据え申して、嬉し泣きに泣いて仮宮を造営し、そこに住まわせ申した。そして急使を派遣し、叔母の飯豊王に奏上した。飯豊王は非常に喜び直ぐに都に上らせなさった。

袁祁命と志毘臣の歌くらべ

袁祁命が即位する前の歌垣の場での話。

平群の臣の祖先である志毘の臣が、袁祁命が結婚する予定の美しい乙女の手をとった。

その乙女は菟田の首の娘の大魚である。そこで袁祁命も歌垣に立った。

そして**志毘臣の歌**は

大宮の　をとつ端手隅傾けり

（お前のご殿のあっちの軒が傾いている。）

と歌ってこの歌の下の歌を要求した。

袁祁命の歌は

大匠拙劣みこそ隅傾けり

（大工の棟梁が下手だから隅が傾いたのだ。私のせいではない。）と[片歌]で反論。

また、**志毘臣の歌**。

王の心を揺み　臣の子の八重の柴垣　入り立たずあり [短歌形式]

（皇子の心が締まらないので、私の厳重な柴垣の中に入り込めずにいるぞ。だから大魚(乙女)を取り戻せないのだ。）そこで**命の歌** [短歌形式]

潮瀬の波折りを見れば
あそびくるしびが端手に妻立てり見ゆ

（潮の早瀬の波の重なりを見ると、泳いでくる鮪のしっぽに妻が立っているのが見える）

＊志毘の名を魚の鮪（しび・奈良時代のマグロなどの総称）に掛けて、魚の分際で女を連れて何だと嘲笑する。

＊御殿や柴垣の掛け合いを期待していた志毘の臣ははぐらかされたばかりか、魚のくせと嘲笑され腹をたて、また歌で挑みかかる。

王の御子の柴垣　八節結り　結りもとほし
切れむ柴垣　焼けむ柴垣 [仏足跡歌体]

（王子の御殿の柴垣は、結び目も沢山に結ってあるが、そんなものはやがて切れてしまうぞ。焼けてしまうぞ）

袁祁命がまた歌った。

大魚よし　しび突く海人よ
しが離れば　心恋しけむ　しび突く志毘

（鮪を突く海人よ。大魚(乙女)が離れて行ったらさぞ恋しく思うだろうな。）

こうして、歌で戦い明かし、それぞれ去った。

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

雛の会（浦和）

大口の凄まじきかな燕の子　喜恵
本籍はダムの底なり虹かかる　輝翠
本当は剪りたくないよこの若葉　チアキ
本尊の他にも秘仏風薫る　燈女
此処よ此処よと大口を開け燕の子　佐江

珊瑚の会（浦和）

ロボットのはこぶランチや麦の秋　光子
麦の秋見え隠れ行く車椅子　恵子
擬宝珠咲かせし隣人はフェミニスト　史代
古書店や戸口北向き麦の秋　広子
在りし日の人思はるる麦の秋　和子
麦秋や心に染むる汽笛の尾　和葉
筑波嶺のはるかに蒼く麦の秋　かつ子
麦秋の雨を誘ふか泣き羅漢　喜恵
画布はまだ手つかずのまま麦の秋　マスミ
麦秋や坂東太郎海のごと　水尾
麦秋や軒端に乾く跣足袋　昇
花ぎぼし囲み女の長話　節代

あゆみの会（浦和）

帯留に魔除けの般若絹袷　啓子
しばらくは風を通せり絹袷　倶子
袷着て千秋楽の芝居小屋　和
梅雨前に譲りの袴わくわくす　山遊
紫陽花や万感胸に最寄り駅　重子
初袷ファッションショーに出る気分　藻好

櫟の会（浦和）

空豆は胎児のまろみ莢に寝ぬ　治子
蚕豆の莢の上向き上天気　あつ子
そら豆や莢に宝石しのばせて　朋子
空を恋ひそら豆身丈伸ばしをり　裕誌
深呼吸して蟻塚を吹き飛ばす　克之
参道を愚直に進む蟻の列　富子
空豆や箱入息子か莢の中　文子
だんご屋の方へ右折の蟻の列　千重子

水明熊谷句会（熊谷）

袈裟がけに来る夕立の早さかな　燈女
おてんばもやんちゃも昼寝保育園　栄子
ウィンカーの弾きものかは大夕立　徹平
アルプスで天を相手の昼寝かな　正行
腹掛に「金」の一文字昼寝かな　卓郎
昼寝人猫を見習ふ風の道　秀子
押鮓に車麩うかす昼の膳　茂子

芽吹句会（浦和）

麦の秋落暉追ひゆく鳥の群　玲子
新緑や天井に聞く竜の声　富子
麦の秋尖塔立てる地平線　修
母の日のクレヨンの香の残る指　ひろこ
乳母車ゆつたり押しゆく麦の秋　久美子
麦の秋胸に琥珀のペンダント　千重子
みちのくを走る人力若葉の天　チアキ
夏の夕嘷天下の声の主　道を

蝌蚪の会（浦和）

芍薬や緩き蕾を求めたる　さち子
心無しに伸ぶる徒長枝薄暑かな　ひさの
積ん読の整理半ばに薄暑かな　朝香
芍薬や園児の群を睥睨す　礼子
流線型のメット一列街薄暑　元美
特段の事何もなし五月闇　風舎
カルメンの花吹き飛ばす芍薬よ　しるく
爪楊枝咥へ俠客ぶる薄暑　月を
乾杯の響き夜空へ街薄暑　鶴城
街角のフェスに人人薄暑かな　宣子

芙蓉句会（浦和）

小流れの水面にうつる薄暑光　正子
坂道をころげて来たる祭り笛　道子
古刹へと登る坂道夏の蝶　税子
沖を往く白帆のロマン薄暑光　仁
コロナ禍の名残のマスク薄暑かな　美子

櫻蔭句会（浦和）

ままごとの主役はいとしゆすらの実　久美子
故里は今万緑の裡に在り　多美子
万緑やスイッチバックの峠越え　由紀子
万緑に分け入る君の赤ザック　真理
万緑や沼の細波エメラルド　美子
ゆすらうめあるじの如く迎へけり　千恵
万緑に吸ひ込まれ行くあずさ号　公子
万緑や老いて胸内に燃ゆるもの　茂子
オール置き一人蒼天と万緑と　行雄
一歩一歩万緑の中頂へ　美智枝
万緑の眠りの中へ夜行バス　幸代

皐月の会（浦和）

点景に翡翠飛び込み艶めけり　山菜
山へ持つ筍飯のにぎり飯　更穂
きたぐにの山を烟らせ新樹蔭　光代
陸奥へ来たれば残る鴨の群　珪子
新樹光オープンカフェのカレー食む　順子
湯気匂ひ筍飯は祖母の味　紀子
ふる里の景を包まむ二重虹　静香
新樹光ご利益あらむ大欅　暦文
新樹光移住家族の山あそび　きいち

りそな俳句会（浦和）

葉桜や海の風来る観音堂　寛治
ナナハンの箱根新道夏浅し　暦文
桜若葉深き公園声高し　建治郎
ひとり旅風の匂ひの浅き夏　久美子
葉桜や遅れて参る例大祭　道を
花は葉に庇の深き蕎麦処　マスミ
夏浅し転がりゐたる山羊の糞　雅夫

りんどう俳句会（浦和）

ぼうたんに位負けして見惚れけり　サヨ子
夏めくやライン下りの大しぶき　翔太
五色幕のさやぐ法堂夏めきぬ　徹雄
夏めくやロックライブへ向かふ古希　まりこ
夏めくや働く袖をたくし上げ　君夫
緋牡丹のいのちをかけし艶姿　治子
方位盤に並ぶ山並風薫る　利子
口裏を合はせ夜遊び夏めきぬ　風子
白牡丹五重塔を遠巻きに　寛治
沖彼方白帆ちらほら初夏の海　弘夫
牡丹に傘遣るあしたしぶき雨　卓郎
夏めくや鏡を過る真白き帆　順子

青葉の会（浦和）

ひたひたと新樹の道を陣馬山　真理
銀山の坑道くぐる夏の旅　美智枝
銀閣や枯山水に松落葉　美子
砂場の子らの緑の影や新樹光　公子
夏落葉巫女の緋袴翻る　啓子
参道の新樹彼方の鳥居まで　洋子
杉落葉やぐらを隠す吹きだまり　和子
寺町の黒塀ぞひに夏落葉　輝翠

野菊の会（与野）

シャガールの女空飛ぶ五月憂し　美代子
滴りや手窪に浮かす生命線　和子
牡丹散る旧友ひとりまだ来ない　清子
参道をそれて賑はふ藤盛り　光子

きざきサークル（浦和）

老鶯や水場に憩ふ山ガール　昇
帯着付けバス待つ女薄暑かな　和枝
老鶯や無住寺に古る仏たち　倶子
朝まだき老鶯を聞く露天風呂　和
公園にキッチンカーや街薄暑　啓子
橋の名を叫び薄暑の漕艇部　和子

水明鬼石句会（鬼石）

みどりの日乳の香残る産着かな　和子
いつの間にみかんの花の匂ふ頃　ナヲ子
柿若葉真向かうの庭隠したり　聡子

若狭水明会（若狭）

愛らしく葉より先だつ桃の花　白鷺
浮雲の形は田にあり風薫る　和風
風薫る五湖を眼下に足湯して　保人
風薫る子等の集まるビオトープ　初花
風薫る巣塔に若きつがひ来る　友夏
口数の少なき娘桃の花　郁子
薫風やあの日のスカーフなびかせて　鼓
柴背負ふ少年ひとり風薫る　ことは
天狗面見入る男の子に風薫る　八重子
帽子とスカート押へ春一番　寛久
桃咲くやあとひと息で寝返る児　登美江
洋服の流行りのフリル豆の花　祥子

鶴川山百合句会（町田）

妻一言相槌ひとつ春行けり　雄二郎
乗り換へる各駅停車春行けり　月を
学校に居場所が無くて葱坊主　喜久
行く春や手持ち無沙汰の手を撫でる　史代
柳絮とび煮沸何度も哺乳瓶　広子
行く春やだし巻卵細くなり　由美子
葱坊主あたま支へる首強し　千春
ゴミ出しの夫のスエット葱坊主　萬蝶
葱坊主はみ出したつていいんだよ　理恵
愛犬の老いてひねもす目借時　美千子
ゆく春や男の羽織る一つ紋　玲子

山茶花（浦和）

木洩れ日の斑のきらきらと夏立ちぬ　マスミ
セリコで行く見上ぐる雲の立夏かな　美江子
夏みかん口痺れさせ背筋伸ぶ　綾子

水明澪つくし句会（大阪）

青春の香る街角五月来る　智恵子
夏近しほのと兆し旅ごころ　洋子
今ひとたび「ダイアナ」探す薔薇の園　人美
群れて咲く紫蘭に迷ふ花鋏　ゆら女

繭の会（浦和）

色褪せしキネマ旬報麦の秋　風子
蝸牛やたら怒るな怒るなよ　風舎
一雨の路傍の石に蝸牛　まりこ
通学班の先頭変はり麦の秋　小麦
麦秋やシネマの中の風の道　比早子
ひげ熟れて夕陽に燃ゆる麦の秋　さよ子
乾杯は大ジョッキでしよ麦の秋　夕峰
麦秋や村に貧しきカテドラル　珪子
しじみ汁その一粒に命あり　悦子
昨今の郵便事情かたつむり　月を
墨汁の滴り落ちて夏近し　鶴城
蝸牛惣領たるは重たかろ　京子

野ばらの会（浦和）

ゆつくりも大事な個性かたつむり　栄子
芯のある飯もおこげもキャンプの夜　茂子
雑魚寝して雨の音きくキャンプかな　秀子
足跡は一筆書きやかたつむり　夏江
名を呼びて思ひの丈をキャンプファイヤー　みき子

光が丘俳句教室（東京）

母の日にふらりとやつて来る男の子　はる
母の日や総菜持つて花持つて　理恵

ミモザの会（横浜）

麦秋やゴッホもモネも影の人　史代
麦の秋地産地消のパン屋あり　栄子
夏蝶や影踏み鬼にふはり来る　詠子
宇宙人降り立つ気配麦の秋　慶子
この先に祖母の笑顔や麦の秋　亜弥子
銀輪の青空に消ゆ麦の秋　玲子
絵手紙より食(は)み出してをり麦の秋　萬蝶
影ひいて水面すれすれ夏燕　千春

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

人気なき河岸の競り場の夕薄暑　延昭
若葉闇ドス声効かす烏どち　俊晴
少女らの軽き装ひ町薄暑　倶子
春昼を乗せて定刻路線バス　美枝子
天下布武若葉を鎧ふ安土城　昇

和歌山水明句会（和歌山）

薫風や逸る駿馬の尾のリボン　和子
五百羅漢の褥ふかぶか竹落葉　道子
新緑の雨のドライブ絵画めく　千枝子
草引くや指の曲がりのそのまんま　千世子
てきぱきと外科医は女性風薫る　満耶子
薫風に走り高跳び優勝す　きわゑ
ナイアガラの滝とおもへり藤ロード　洋子
画用紙をはみだす鯱に夏は来ぬ　廸代

新樹の会（浦和）

天命も知命も知らず心太　風子
夏安居の鐘の響きや知恩院　修
知床の山隠しをり夏の霧　清吉
知らぬまに身につく仕種若葉風　徹雄
落日の玄界灘にあご飛べり　道を
夏場所や芸妓が並ぶ砂かぶり　平通
草笛や合戦の地の川原石　鶴城

神戸大池句会（神戸）

蒼穹の兵庫大仏風薫る　玲子
忍冬に竹馬の友の声聞ゆ　千津子
芍薬と菖蒲も添ふる忌日かな　早苗

たかんな俳句会（川口）

式典のテント張り終へ夏の雲　のり子
代田より富士の農鳥仰ぎ見る　福美
十薬や式典の中電子音　小麦
漣波に寄するさざなみ代田かな　水尾
連山を映す代田の水鏡　義子
肴にもなる筍飯の迷ひ箸　謙一
戴冠の典雅な調べ青時雨　静香
原発の村にも灯り田水引く　鶴城

俳句の手ほどき（岩槻）

醤屋の土管煙突柿若葉　延昭
柿若葉ひかり一筋濡れ仏　倭子
妙齢の塩瀬の帯や柿若葉　佐江
江の電の走る街並柿若葉　水尾
旅は東北すかつと晴れて柿若葉　義子
雷鳴や眼差し光る仁王門　徹平
井戸水を注ぐ水差し夏館　翔太
うらうらに葉脈透けて柿若葉　忠男
久久の時差ぼけの日の春の昼　美子
少年の目差涼し弓道場　桂子
状差しに亡き人の文五月闇　幸代
世代差の中でくらすや柿若葉　久美子
風にのる犬の産声柿若葉　卓郎
縁談は叔母の差し金茴香　かつ子

円卓の会（浦和）

山小屋のランプの灯り黙盛る　翔太
五月雨写経の筆の重だるく　輝翠
成田屋の十八番弁慶風青し　道を
何もかも知らずに話す暑のインコ　拓真
二度生くる覚悟の眼山椒魚　静香
着ることもなく父の形見の夏衣　修
喧騒を遠目で眺む山椒魚　亮一
五月雨や松林図なる新都心　京子
若葉騒ゲーテの辞世噛みしめて　月を
明日へと沈みゆく陽に何を詫ぶ　鶴城

柿の木塾（浦和）

手のひらに風の重さよ山滴る　水尾
滴りの山肌磨ききらきらと　恵子
石一つ友に積みけり山滴る　和葉
滴りて億年の穴岩盤に　章嘉
山滴る「熊出没」の大看板　かつ子
乾杯のグラスに写る花菖蒲　節代
山滴る伊勢へ十里の道しるべ　昇
滴りを一と飲身心新たなる　和子

めだか句会（浦和）

日の浅き命溢れり初夏の森　十三子
初夏の風仲睦まじき道祖神　はるみ
ぼうたんの見てゐる異国夜明け前　六弦
美しき散りぎはもまた牡丹かな　忠夫
雨ふくむ車列の響き初夏の暁　知子
抱腹のムカデ競争夏始め　敦子
二の腕の水を弾いて夏はじめ　月を
すれ違ふ人の面立ち深見草　鶴城
山野草見つけてはしやぐ初夏の山　美智

若鮎句会（浦和）

戸を立てしままの隣家や花は葉に　芳春
短パンの手足すくつと夏来たる　稀香
「夏は来ぬ」思はずメロディー口を衝く　順子
ことごとく差歯のやうに花は葉に　拓真
空色の綿シャツ探す立夏かな　秀子
葉桜や会話弾みし老夫婦　香音子
さりげなき一筆箋に夏来る　さなえ
花は葉につれづれの事切符買ふ　紀子
平均律は無理数であり今朝の夏　月を
サンダルの若者闊歩立夏かな　喜夫
東京の膨らみきつて花は葉に　鶴城

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。添付の指定「参加申込書」を使用し、参加費を添えて７月 20 日㈬までに発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。

【夏　行】　第１日目：令和５年７月 29 日㈯
午後１時～５時（午後 12 時 30 分受付）
第２日目：令和５年７月 30 日㈰
午後１時～５時（午後 12 時 30 分受付）
第３日目：令和５年７月 31 日㈪
午前 11 時 30 分～５時（午前 11 時受付）
※第３日目の開始時刻は１時間 30 分早くなっております。

【会　場】　JR 浦和駅東口「浦和パルコ」９階および 10 階
浦和コミュニティーセンター
第１日目／第 15 会議室（９階）
第２日目・第３日目／第 13 集会室（10 階）

【参加費】　夏行：各日 1,000 円

事業部

『俳句』 五月号
作品8句

春なれど

山本鬼之介

先生に児童が贈る春氷
木の札に「小唄おけいこ」枝垂梅
春眠を覚ます行平鍋の蓋
回転ドアを入れど出られず春の昼
比良八荒大阪管区気象台
吾は両刀春夕さりの北千住
生粋の江戸弁花の吾妻橋
黄塵のがれいま大刹の黒書院

『俳壇』 五月号
空想季語に遊ぶ〔春夏篇〕

水明

創刊・昭和5年
師系・長谷川かな女
主宰・山本鬼之介

亀鳴く
亀鳴くや命の軽くなりすぎる　青木鶴城

竜天に登る
竜天に登る阿蘇より立つ煙　反町　修

目借時
古書店のたまの店番目借時　梅澤輝翠

虎が雨
虎が雨よもや貞女の深情け　日高道を

蟭螟
蟭螟や子離れできぬ母居りぬ　保坂翔太

炎帝
炎帝やレトロ硝子に映る街　野田静香

夏季競詠

（令和五年）

恒例の季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるって御出句ください。したがって七月投句の水明集はお休みです。

兼　題　「団　扇」　「絵団扇」「絹団扇」「京団扇」「渋団扇」「古団扇」の傍題に限る

「夾竹桃」　傍題無

「　保　」（詠込み）※夏の季語で詠む

句　数　両題通じて五句

締　切　七月二十五日

投句用紙　七月号巻末に添付
季音の方は季音も投句して下さい。

風声

○**俳句四季**五月号――「季語を詠む」欄

水盤を思ひ思ひの魚影かな　**鬼之介**

○**現代俳句**五月号――「現代俳句の風」欄

小ブーケの中に堂々花なづな　鈴木和子
ひと駅を乗り越してみる遅日かな　青木鶴城
日の匂ひそつとたたみぬ春日傘　越田栄子
花筏亀がひよつこり顔を出す　杉浦理恵
テノールもバリトンもあり猫の恋　原田秀子
春の宵「ごきげんよう」の似合ふ人　丸山マスミ
告天子地球すつぽりCO_2　由良ゆら女

○**天塚**（宮谷昌代主宰）五月号――「珠玉一句」欄

明治座へ向かふ足取り春時雨　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）五月号――「受贈俳誌美術館」欄

破顔せる不動明王春の夢　**鬼之介**

○**好日**（髙橋健文主宰）五月号――「受贈誌御礼」欄

天井を鏡の光日脚伸ぶ　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞代表）五月号――「受贈俳誌紹介」欄

明治座へ向かふ足取り春時雨　**鬼之介**

○**太陽**（吉原文音主宰）五月号――「受贈誌御礼」欄

明治座へ向かふ足取り春時雨　**鬼之介**

○**玉梓**（名村早智子主宰）五・六月号――「他誌拝見」欄

悔恨の唇かめば春寒し　**鬼之介**

○**暖響**（江中真弓選者）五月号――「他誌散策」欄

浅井證善氏の鑑賞により
「水明」二〇二三年二月号（通巻一一〇九号）

人間が神を演ずる里神楽　**鬼之介**
勤行は法華の太鼓寒びより　〃

主宰**山本鬼之介**氏「矢音」八句の中の二句。一句目、里神楽とは宮中以外の諸社で催される神楽を指す。そもそも神楽の本義は、神自らがそこに現れて舞うことにあるとされる。神が人によって演じられることは、日本の神はそれだけ人間的であると言う証である。二句目、真冬の特に晴れ渡った早朝は寒極む。それ故に法華太鼓が寒日和を景気づける。南無妙法蓮華経の言に光が増広する。なおこの俳誌の見返しには、主宰推薦の誠に純情に満ちた一句が掲載されている。

○**菜の花**（伊藤政美主宰）五月号――「諸家近詠」欄

落葉掃く若き僧侶の目はブルー　小林京子
観梅や切つた張つたの日日忘れ　**鬼之介**

○**山彦**（河村正浩主宰）五月号――「諸家近詠」欄

人間が神を演ずる里神楽　**鬼之介**

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和五年五月三十一日現在—

山本鬼之介	50口	加藤イツ子	10口
石井喜恵	10口	上戸千津子	10口
丸山マスミ	5口	佐々木史女	3口
山下ユリ子	5口	下川光子	5口
島津初花	20口	保坂翔太	5口
飯田忠男	10口	永野史代	10口
大塚茂子	10口		

—合計153口—

〈事務局長交代〉

健康上の都合により、**井口俊晴**氏が五月三十一日付で常任運営幹事と事務局長を辞任し、六月一日付で**保坂翔太**氏が事務局長兼事業部部員に就任しました。

埼玉 新刊

水明抄 水明俳句会著

水明俳句会（山本鬼之介主宰）の第17合同句集。会員170人から各20句の投稿を掲載。1955年の第1集から活動67年を迎え「水明創刊90周年と通巻1100号の大慶事を包み込み、初代・長谷川かな女の原点に立ち還った」（序）とする。（3500円）

毎日新聞（二〇二三年六月一日）

○「第17水明抄」が少しありますので、ご希望の方は事務所までお問合せ下さい。

後記

水明では、去る五月二十九日、三十日、三十一日に若狭を訪問しました。詳細については、本号に五明昇、青木鶴城のお二方が、詳しく執筆下さっているので、ご覧下さいませ。

今回の参加者は二十九名のバス旅行です。若狭に行くのは初めての方も多くて、大いに盛り上がりました。出発は浦和パインズホテルの近くから朝七時とあって、神奈川や熊谷等から、ご参加の方は大変でした。若狭は遠いので、初日と三日目は一日中バスという強行軍、しかし、心暖い若狭の方々に歓迎をして頂き、故郷に帰ったような、心暖まる一時でした。初めてご参加の方々は、若狭の方々のやさしさ、暖かさ、そして美味な山海の食物に魅了されたようでした。

ところで、私には、季音月評「硯箱」を長年にわたってお書き下さった、井口俊晴氏の降板のお申し出により次の方をお願いするという、お役がありました。若狭の方々との宴会の最中に、主宰の応援を得て、「檜鼻ことは」氏にお願いしました。横から鳥羽和風氏も応援して下さったので、まんまと、ことは氏に応諾して頂きました。

句集喝采の近藤徹平氏、俳誌望見の梅澤佐江氏も、本当に長い間ご執筆頂きました。こちらは、句集喝采を曲淵徹雄氏、俳誌望見を染谷風子氏にお願いしました。俳誌望見は今月から、句集喝采と季音月評は八月から新しい執筆者に変りますので、どうぞご期待下さいませ。

井口俊晴氏、近藤徹平氏、梅澤佐江氏には、長年にわたりご執筆頂きありがとうございました。また次の機会によろしくお願いします。

梅雨明け十日、皆様にはどうぞお体お大切に。

（節代）

今月のはてな？

	頁
貌佳草（かおよぐさ）	24
倒（こ）ける	35
陸寄居虫（おかやどかり）	46
比目魚筋（ひらめきん）	47
慥（たし）か	〃
焚香（ふんこう）	〃
焼（く）ぶる	49
綰（わが・たが）ねる	62
焙烙（ほうろく）	63
花茴香（はなういきょう）	81
蟭螟（しょうめい）	82

水明発行所受付時間

（048−822−4741）
曜日：（月・火・水・木・金）
時間：12時半〜午後4時半
（土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和五年七月号
通巻一一一四号
令和五年七月一日発行

発行所　水明俳句会
〒330-0064　さいたま市浦和区岸町四－一〇－二
電話　048－822－四七四一

ホームページ
「水明俳句会」で検索

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇－〇－一九二三九三

発行人　山本鬼之介
印刷所　中央美版

き り と り せ ん

令和五年度夏季競詠　十月号　七月二十五日締切

「団　扇」傍題可
「夾竹桃」傍題無
「　保　」詠込み
通じて五句

都市又は府県名	氏名（俳号）

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒　　　　職業

氏名　　　　年齢

令和五年度水明夏行

参加申込書〈申込締切　7月20日〉

夏行第１日目	7月29日(土) 13:00～17:00	会費￥1,000円	出席・欠席
夏行第２日目	7月30日(日) 13:00～17:00	会費￥1,000円	出席・欠席
夏行第３日目	7月31日(月) 11:30～17:00	会費￥1,000円	出席・欠席

※出席もしくは欠席を○で囲んでください。

合計金額	￥　　　　　　　—

※※会費合計金額を記入してください。

※上記参加費を添えて申し込みます。

2023年7月　　　日

住　所	〒		
氏　名		電　話	（　　）

申込書送付先

〒330-0064　さいたま市浦和区岸町4-10-21　水明俳句会

〔緊急連絡先電話番号〕

電話番号	（　　）
電話所有者	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。
　緊急時の実に使用し他の用途には使用いたしません。

きりとりせん

きりとりせん

季音 雪 月 花

九月号 七月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(俳号)

題

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

きりとりせん

山紫集

十月号　七月二十五日締切

氏名（俳号）

七月の兼題　「羽抜鳥」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

きりとりせん

水明通信

都市又は府県名

姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇‐〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四―十―二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　　–		
氏名		電話番号	–　　–

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

天辺を玉座とおもふ沙羅の花　西山貴美子
麦秋や指切りと言ふ淋しきもの　波多野寿子
可不可なきゆるき人生蝸牛　星野和葉
麦秋の空より鴉もつれ落つ　茂木和子
砂塵舞ふ大内宿を鯉幟　森本早苗
初鰹家紋の踊る大漁旗　矢作水尾
白牡丹五重塔を遠巻きに　高島寛治
万緑に埋め尽くさるる鏡池　池田雅夫
夏がすみ魁夷の白馬現るや　梅澤佐江
薔薇垣や女ひとりの灯を点す　森川義子
夏めくや鏡を過ぐる真白き帆　大場順子
灯台の死角に卯波胸騒ぎ　正木萬蝶
戴冠の典雅な調べ青時雨　野田静香
帯留に魔除けの般若絹袷　笹本啓子
棟上げは二つもむかし若緑　檜鼻ことは
黒鍵を躍る指先五月来る　原田秀子
かたつむり地球の果の遠きこと　青木鶴城
母の日はいつか妻の日二人旅　日高道を

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞
「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、
二百字詰原稿用紙一句一枚以内
（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉
読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。
要領は、
二百字詰原稿用紙一件一枚以内
（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉
テーマ…自由
枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

逃水を追うて八十路の青い鳥　清水桂子
女生徒の国歌独唱風光る　越田栄子
春風やワルツを踊るポリ袋　新　暦文
落し文渡してほしや紋黄蝶　梅澤輝翠
春風や獣医学部に牛五頭　森下山菜
老い深き犬と少年春の夕　山岸久美子
姿勢よき吾が学舎の松の芯　丸屋詠子
巫女の手に微かに触るる春祭　元田亮一
歌舞伎座へ後ろ姿の春日傘　反町　修
陽炎や坂ゆく車夫の比目魚筋　菅原卓郎
終の地に桃の花咲く日和かな　篠崎紀子
饅頭の焼印は鳥春の雲　池田珪子
春深し二の腕に射す日の匂ひ　皆川更穂
あいさつは先づ苗代の育ちから　岡田宣子
江戸風情のこる町並春日傘　菅原真理
花爛漫かつてこの地に近衛兵　小林京子
郵袋を仕舞ふ男の春夕べ　阿部幸代
鳴き砂に浮かれて歩く春の海　西幅公子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㊇（パルコ・10F）	山本鬼之介	茂木和子 境　延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明　昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㊇（パルコ・10F）	椎野美代子	境　延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㊇	大橋廸代	森本早苗

水明　令和五年七月一日発行　毎月一日発行　（第九十六巻　第七号）　定価　一〇〇〇円